

床面上から出土した壺形土器などは、床面に接触している部分以外は2次的な焼成を受けていたが、当初から床面上に置かれていたとは考えられない状況であった。また、土器の出土した付近には特に炭化物が多くなことなどの出土状況から、もともとはこれらの土器は植物性の何らかの容器（籠など）に収められていたのが、火災の際に落下してきたのではないかと考えられる。

なお、支柱等の構造については、調査地の限定により明らかにすることはできなかった。



fig. 8-10. S B01遺物出土状況

- S D01** S B01の南で検出されたほぼ南北方向の溝で、幅0.6~0.9m、深さ0.6~0.8mのV字溝である。溝内の埋土からは、弥生時代中期後半の土器片が出土した。
- S D02** 南北トレンチのほぼ中央で南北方向に約17m検出された溝で、幅20~30cm・深さ約10cmと浅い。S B01の東では、住居址を巡るように弧を描く。
- S D03** 東西方向に流れる幅1.2~2m以上・深さ約0.4mの溝で、埋土の堆積状況から自然流路と考えられる。遺物は、弥生土器の細片が僅かに出土しただけである。
- S D04** 幅60cm・深さ10cm内の溝状の落ち込みである。
- S D05** 東西トレンチの東端で検出された幅0.8~1.3m・深さ約30cmの溝で、一部分しか検出されていないため明確ではないが、ほぼ直角に曲がるようである。
- S K01** ほぼ長方形の土坑で、規模は幅1.0m・長さ1.3m以上・深さ0.45mである。土坑内より把手付壺形土器が出土した。
- S K02** 長径1.1m・短径0.8mの不整梢円形の土坑で、深さ約0.2mと浅い。
- ピット** 2ヵ所で検出されたが、性格は不明である。
- これらの遺構は、弥生時代中期後半(IV様式)の時期に位置づけられる。出土遺物は弥生土器の他には、石鏃1点と石包丁片1点がある。

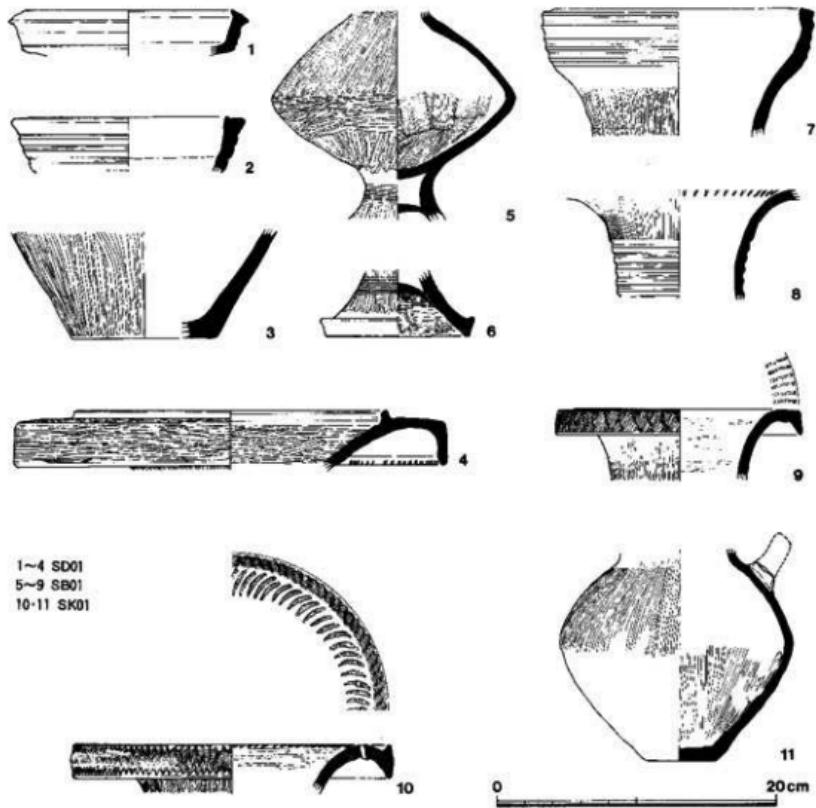


fig. 8-11. 遺物実測図

3. まとめ

今回の調査によって、前回、第1次調査で確認された平安時代末～鎌倉時代の遺構、畦畔状遺構、弥生時代中期後半の遺構は、今回調査地付近までは拡がっていることが明らかとなった。おそらく、北限は現天井川の付近と考えられる。

今回の調査で検出された弥生時代の遺構は、すべて中期後半（IV様式）と考えられる。近年になり、新方遺跡における発掘調査例が増え各地点での遺構の時期が明らかにされつつある。大きな拡がりをもつ新方遺跡において、今後の調査例の増加により、弥生時代における位置的な問題を含め、生活址の移り変わりが明らかにされることが期待される。

9. 頭高山遺跡

1. はじめに

頭高山遺跡は、昭和53年度に分布調査、昭和55・56年に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、頭高山の頂部を中心に遺跡の存在を確認した。これにより、標高100mの等高線より山頂部を保存範囲とした。昭和57・58年には頂部から南東の斜面地約7,000m²を調査し、急斜面地につくられたいわゆる高地性集落であることが判明した。

今年度の調査地点は、55・56年に調査された頂部以外の山裾部である。試掘トレンチは幅1mで、4・14トレンチを除き尾根上に合計11本設定した。

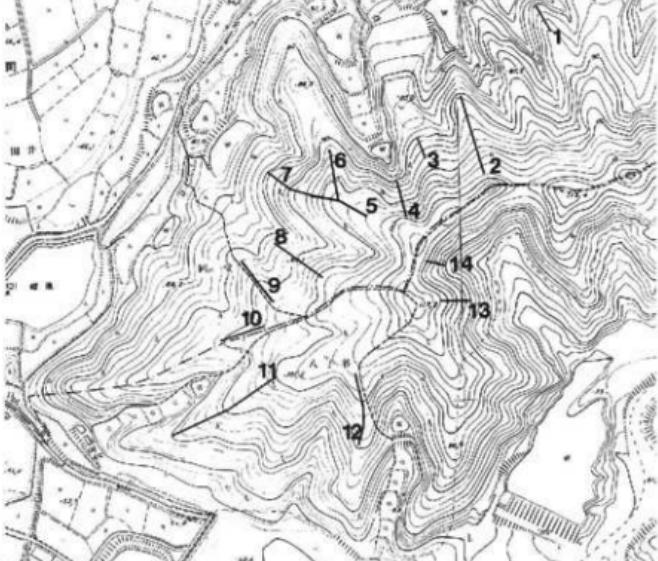


fig. 9-1.
調査トレンチ位置図

2. 調査の概要

基本層序は、表土（腐植土）、黄色混疊泥砂層（間層）、地山となり、全体に礫が多く含まれた層が多い。深さは、約0.4m程度で地山に達する。

1トレンチでは、境界を示すものとみられる石が2基検出された。一方は30cmほどの細長い円柱状の石、もう一方は20cmほどの三角錐の石である。両方とも石を除去すると不減材とされる炭を埋置していた。

2トレンチでは、焼土坑、3トレンチでは土坑とピットが検出された。

4トレンチでは、溝状遺構2条と落ち込み状遺構が検出された。落ち込み状遺構内より弥生時代中期の土器片が出土した。

5・6・7トレンチは、矩形に伸びる尾根の形状を考慮し、Y字状にトレンチを設定した。5トレンチでは性格が不明な遺構を3基検出した。SX01より多量の弥生土器片と炭が出土した。このSX01と同一面よりSX02・03が検出された。ともに焼土と炭が多量に入っていた。6トレンチではトレンチ北端部で土坑が、7トレンチでは焼土坑と思われるものやピットが検出された。

8トレンチでは、ピットと段状遺構が検出された。出土遺物は少量の弥生土器片である。9トレンチではピット2ヵ所が検出された。間層より研磨痕のある石器が出土している。10トレンチではピットと焼土塊が検出され、微量であるが弥生土器片が出土した。11トレンチでは性格不明の疊敷が2ヵ所、トレンチ北端部表土直下に検出された。疊敷は径2~10cmで2.5~3mにわたって検出された。疊敷の下より土師器・須恵器・陶器片が少量出土した。性格不明の落ち込み遺構からは弥生土器片が少量出土した。その他に、皿状に焼けたピットが検出された。

12トレンチでは、溝状遺構とピットが検出された。また間層からは弥生土器片が出土している。その他に径1m程の円形の土坑が検出された。上面より炭が多く検出され、土師器皿が2枚伏せた状態で出土した。遺物から中世後半頃の火葬墓と考えられる遺構である。

13トレンチは遺構は検出されなかったが、弥生土器片がトレンチ中央部でまとまって出土した。

14トレンチは谷部に設けたトレンチで、堆積土が厚く約1mで地山に達する。特に遺構の検出はなかった。地山にのる淡黄褐色泥砂層より大量の土器と石器が出土した。土器は、壺・甕・高杯・台付鉢などである。石器は扁平片刃石斧片・サヌカイトフレークである。出土量は28%入りコンテナに1箱分である。

調査結果一覧表

トレンチ番号	遺構	遺物	トレンチ番号	遺構	遺物
1	境界石(近世?)	炭	9	ピット2	石器
2	焼土坑	焼土・炭	10	ピット	焼土・炭・弥生土器
3	土坑・ピット		11	ピット2	焼土・炭
4	溝状遺構2	弥生土器		落ち込み状遺構	弥生土器・須恵器
5	落ち込み状遺構3	焼土・炭・弥生土器	12	溝状遺構・ピット	弥生土器・土師器皿
6	土坑	炭	13	なし	弥生土器
7	ピット	焼土	14	なし	大量の遺物 弥生土器・石器
8	段状遺構・ピット2	弥生土器			

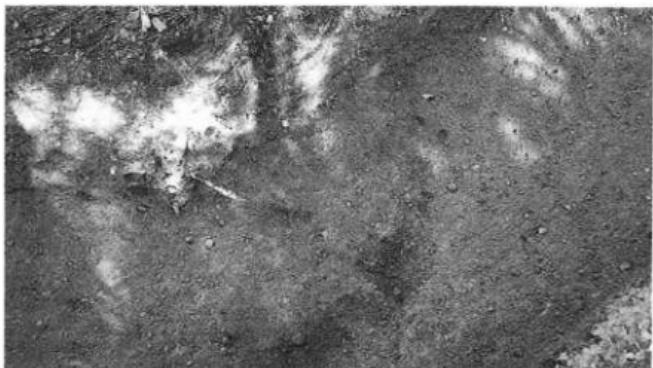


fig. 9 - 2.
7 トレンチ焼土坑



fig. 9 - 3.
8 トレンチ段状造体



fig. 9 - 4.
11 トレンチ焼土坑

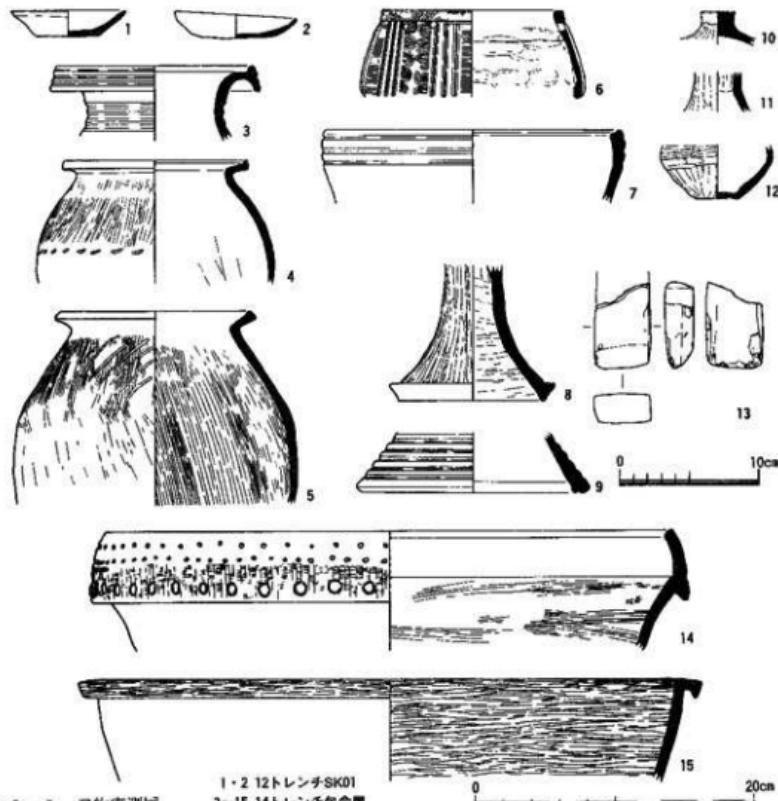


fig. 9-5. 遺物実測図

1・2 12トレンチSK01
3~15 14トレンチ包含層

3. まとめ

14本のトレンチ調査の結果、現在緑地として残る頭高山に、造構、遺物の無い個所はまず無いと言っても過言でない。集落として遺構の疎密はあると考えられるが、広大な集落が存在することはまず間違いないであろう。

出土遺物は、ほぼ弥生時代中期のものと考えられる。昭和57・58年度の調査時と同様に、尾根上より焼土坑が検出されている。狼煙として使用されたものと判断できないが、尾根上に検出されていることから、その可能性も考えられる。

また、当遺跡は今まで弥生時代の集落の存在する遺跡として捉えられてきたが、今回の調査で、中世の造構が検出されたことは特記されることである。

10. 太山寺遺跡

1. はじめに

国宝の本堂（鎌倉時代）を有する太山寺関連の調査は、これまで2回実施したが、平安時代から江戸時代までの掘立柱建物・水溜遺構・列石遺構・井戸等の遺構が検出された。当寺の盛時に「坊」として建てられていた40数坊の堂宇の創建期は平安時代後期に求められ、鎌倉・室町時代に隆盛を迎えた。江戸時代後期には大部分が開拓されたと考えられる。

2. 調査の概要

今回の調査は、多くの塔頭が存在したと伝えられる太山寺本坊の北東部の宝光坊川左岸段丘上にある真善坊・松本坊地区と、太山寺南西の河岸段丘部にある垣内地区において実施した。垣内地区の中央部から北側には旧道が通り、太山寺への参拝路として駆けたと伝えられ、太山寺関連の中近世集落が存在していると考えられる。

しんぜんぼう
真善坊・
まつもとぼう
松本坊地区

A トレンチ

地山が東から西に傾斜し、トレンチ西端で宝光坊川に向かって急傾斜して落ち込んでいた。現在の水田は傾斜面を埋めてつくられ、埋土内の瓦片などから、江戸時代後期の造成によるものと考えられる。遺構は発見されなかった。

B トレンチ

トレンチ中央部では、耕作土直下で地山となり、東に緩やかに傾斜している。トレンチ西端で幅2m・深さ0.6mの溝を検出した。溝内は砂礫土が埋まり、埋土内より土器破片が出土している。

C トレンチ

長さ14m・幅3mのトレンチである。表土直下で地山となり、遺構・遺物は検出されなかった。

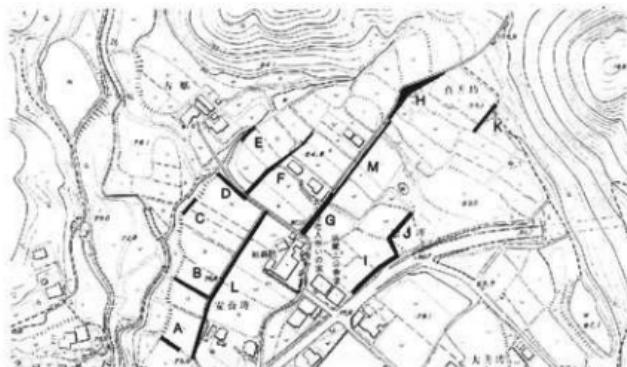


Fig.10-1.
真善坊・松本坊地区
調査位置図

Dトレンチ

トレンチ東部で瓦溜まり遺構を検出した。瓦溜まり遺構は、長径3.8m・短径1.7mの長楕円形の掘形内に瓦・土器類と割り石・河原石が埋められていた。埋土内の石材は、掘形の南部では河原石が集積し、北部では大型の割り石と瓦類が折り重なって検出された。石材と瓦類を除去した結果、掘形南部から、瓦溜まりを切って掘りこまれていたと考えられる井戸状遺構が検出された。井戸状遺構は、直径1.3mの円形掘形に、直径0.9m・深さ0.35mの内枠を設けたと考えられる。内枠の壁面に貼り付いていた割り竹が巡っていた。おそらく桶のタガであったと考えられる。埋土上層より土器破片が出土した。瓦溜まり遺構は長径2.85m・短径1.7m・深さ0.5mの長楕円形の土坑である。底面は平坦で北から南に傾斜し、南よりに方形の石材が置かれていた。出土遺物は軒丸瓦片・丸瓦片・陶磁器片・土師器片である。

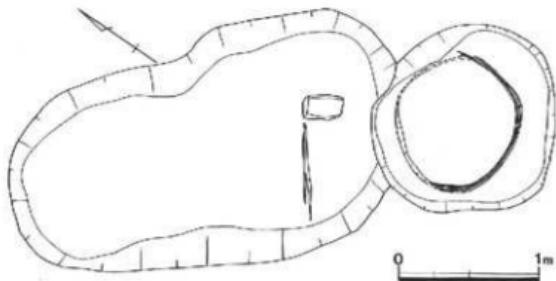


fig.10-2.
井戸状遺構平面図



fig.10-3.
井戸状遺構・瓦溜遺構全景

Eトレンチ 地表下0.6mで炭を含む遺物包含層を確認したが、遺構は検出されなかった。

Fトレンチ トレンチの東端部で炭を含む溝3条を検出した。溝はすべてトレンチに直交している。東側の溝は幅0.9m・深さ0.25mを測る。中央の溝は幅1.5m・深さ0.14mである。西側の溝は幅0.6m・深さ0.2mである。埋土内より遺物は出土しなかった。

トレンチ中央部では、水田造成土下は地山となり、遺構・遺物の出土はなかった。

トレンチ西部では、地表下0.4m～0.6mで室町時代前後の遺物包含層がひろがり、包含層上面から掘りこまれる井戸を2基検出した。

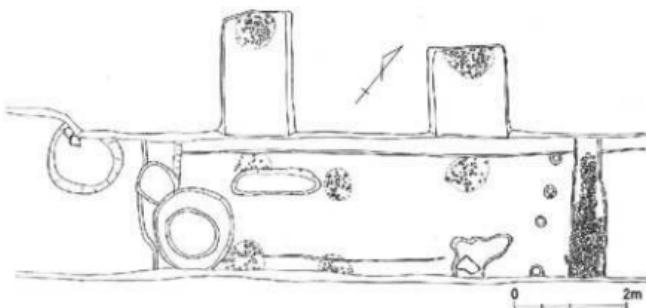


fig.10-4. Fトレンチ基壇状遺構平面図



fig.10-5. 基壇状遺構

- 井戸1** 長径1.7m・短径1.4mを測る掘形のやや西よりに、径1.2mの井戸枠を設けている。深さは0.35mを測る。井戸枠内より土師器羽釜が出土した。
- 井戸2** 井戸1の南に近接して掘られている井戸2は、径1.6mの円形掘形に、径1.0mの井戸枠を設ける。深さ0.5mで、井戸枠内より軒丸瓦片が出土している。
- 段状の落ち込み** さらに、遺物包含層を除去した結果、トレント西端から東8.7m地点で、段状の落ち込みを検出した。地山を約10cm前後掘り込み、厚さ15cm前後の盛土を堅くしめて、平坦面をつくっている。
- 石敷溝** トレント東端から西4mの地点で、石敷溝が検出された。幅0.9m・深さ0.25mで、上層に河原石が埋められている。下層には灰色砂質土が堆積していた。
- 基壇** 段状の落ち込みと溝の間の平坦面上には、須恵器・土師器・鉄釘などが出土し、河原石が散乱した状態であった。これらのことから、段と溝に囲まれる部分は、建物に伴う基壇と考えられた。基壇上層の暗灰色砂質土を地山まで除去した結果、礎石状の石材1カ所・根石状の集石7カ所・石敷溝に平行して並ぶピット4カ所を検出した。このことから、南北側に庇を設け、東側に縁を付設する南北棟建物が存在していたと推定される。規模は、母屋の梁間2.4m・庇の出1.4mである。
- Gトレント** トレント西端では、江戸時代以降の造成土によって埋められ、遺物・遺構の発見はなかった。
- Hトレント** 近世以降の棚田造成土を除去した結果、地山を検出しただけで、遺構の検出はなかった。
- Iトレント** 県道明石・神戸・宝塚線沿いで、方形の石組み遺構を検出した。4.5m×2.6mの方形掘形の内側を20~60cm大の割り石材を並べ、内部に河原石を敷詰めていた。石組みの区画内は、暗灰色粘質土と落ち込んだ割り石によって埋められている。石組み南辺中央に取水口状の石列が観察でき、南東部には石の上面が凹面状になった大型石材がある。これらの検出状況から、何らかの庭園関連遺構が存在していた可能性も考えられる。埋土内より室町時代頃のすり鉢が出土した。
- Jトレント** 床土直下に厚さ20cm前後の遺物包含層を検出した。トレント中央部東よりで幅3.5m・深さ0.3mの河道路跡、ピット8カ所を検出したが、遺構内から遺物は出土しなかった。
- Kトレント** 昭和61年度調査で、瓦溜まりと丸瓦による暗渠遺構を確認した地区である。トレント東部では、水溜状遺構2カ所、丸瓦による暗渠1条と礎盤をもつ柱掘形など6カ所を検出した。

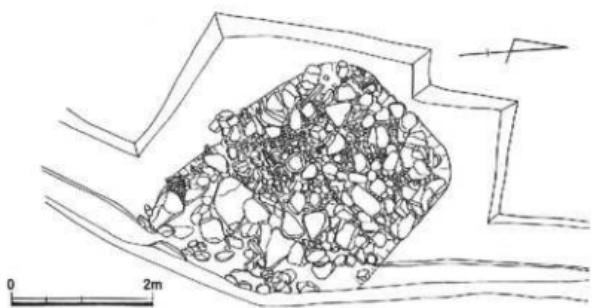


fig.10-6.
I トレンチ石組遺構平面図



fig.10-7.
I トレンチ石組遺構



fig.10-8.
K トレンチ石組遺構

水溜状遺構

水溜状遺構はトレンチ東南部で検出した。いずれも、甕を掘形内に埋める形式をとっている。水溜状遺構1は、丹波焼の甕を埋め、北側に平瓦を敷いて取水口としていたと考えられる。暗渠道構は、平瓦を敷いた後に丸瓦をのせて土管状にしており、北から南へ流れたものと考えられる。ピットは5カ所検出したが、建物としてまとまるものはない。

トレンチ西部では、瓦を多量に含む整地層を掘りこんで、丸瓦による暗渠道構と石組みの溝を検出した。石組みの遺構は幅0.8m前後の南北溝で、両側に割り石を並べている。

これらの遺構は、近世瓦を含む整地層に掘りこんでおり、江戸時代後期以降のものと考えられる。

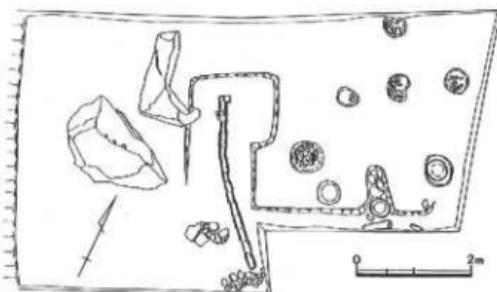


fig.10-9.
K トレンチ平面図



fig.10-10. 暗渠道構

かいり 塙内地区

調査地は、大小の排水路・農道・パイプライン予定地にトレーニチを設定して実施した。

1 トレーニチ 床土直下に近世遺物、その下層に中世遺物を含む土層がみられるが、これらの土層下の地山面では遺構は検出されなかった。

2 トレーニチ 床土直下に中世土器を含む土層が水平に堆積している。その下層の地山面で土坑1基・ピット7カ所を検出した。土坑はトレーニチ東辺に接して検出した平面長方形の土坑で、断面皿状を呈し、深さ約40cmを計測する。ピット7カ所は、建物としてまとまらない。

3 トレーニチ 段丘端部の削平予定農地に設定したトレーニチである。室町～江戸時代に至る3時期の水田面を確認した。最下層の水田直下の地山面で不整形土坑1・柱穴群・溝状遺構1を検出した。

トレーニチ中央部で検出した不整形土坑は、南北3.5m・東西2.1m・深さ14cmを計測する。土坑南辺で土師器羽釜1個体分が出土した。柱穴群はトレーニチ西部と東部で集中してみられるが、建物としてはまとまらない。溝状遺構はトレーニチ中央部西よりで検出した。溝の規模は、幅2.0m・深さ0.2m前後で、北西から東方へ蛇行している。溝上層より瓦器片・土師器羽釜・青磁器片が出土した。

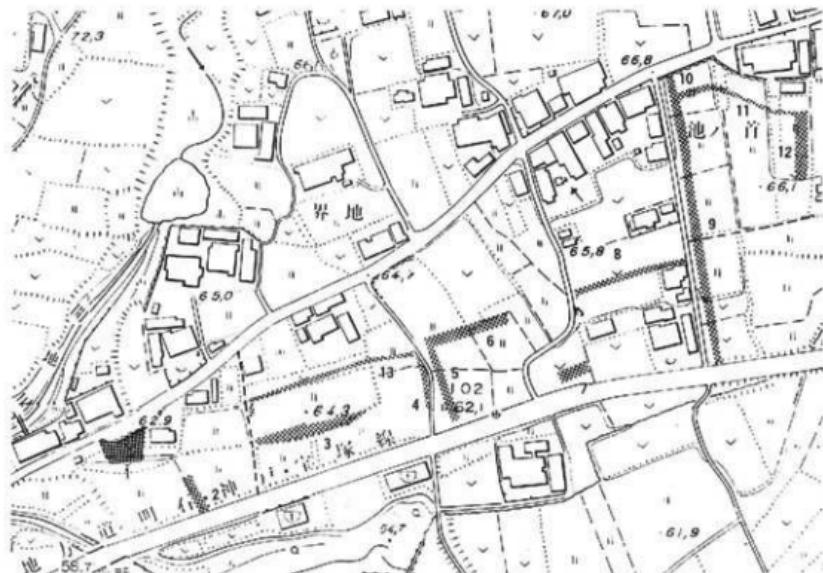


fig.10-11. 塙内地区調査地位置図

- 4トレンチ 水田造成土から近世遺物が出土したが、遺構は発見されなかった。
- 5・6トレンチ 5トレンチ北部と6トレンチ西部で、谷状に落ち込む自然地形を確認した。谷を埋めた砂礫層から土師器皿・須恵器片・青磁器片など多数出土した。5トレンチの谷底では・辺1.3m・深さ0.3mの方形土坑を検出した。埋土内からは土師器片が出土した。
- 7トレンチ 井戸状遺構1基・不整形土坑2基を検出した。出土した陶磁器片から、江戸時代以後のものと考えられる。
- 8トレンチ 地表下約40cmで地山となり、遺構・遺物ともに検出されなかった。
- 9・10トレンチ 9・10トレンチの全域に、厚さ20cm前後の遺物包含層が、床土直下に堆積していた。遺物包含層を除去した結果、地山を掘り込んで遺構を検出した。トレンチ南部では、不整形土坑4基・ピット7カ所・溝1条を検出した。トレンチ中央部では井戸状遺構1基・集石土坑墓6基を確認した。トレンチ北部と10トレンチでは焼土を含むピット群がみられる。トレンチ南部の不整形土坑・ピット・溝はいずれも灰色砂質土を埋土とするが、遺構の性格は明らかでない。埋土内より土師器細片が出土している。
- トレンチ中央部で検出した集石墓のうち、3基は幅50cm~80cmの弧状の溝を掘り、さらに溝内に長方形の掘形を設け遺体を埋納し、河原石によつて埋めている。ST02~ST04の西側に近接して南北に並んで2基の土坑墓(ST01・05)があり、同様に河原石で埋められている。
- ST01 長辺1.9m・短辺0.7m・深さ0.3mの方形土坑を掘り、拳大の河原石で埋めている。土師器片・須恵器片が出土している。
- ST02 長辺1.55m・短辺0.6m・深さ0.15m の方形土坑を掘り、拳大の河原石により埋められている。須恵器壺片が出土している。
- ST03 長辺1.4m・短辺0.5m・深さ0.15m の方形土坑を掘り、拳大の河原石により埋めている。土師器羽釜片が出土している。
- ST04 長辺0.9m・短辺0.3m・深さ0.13m の方形土坑を掘り、拳大の河原石により埋めている。須恵器壺口縁部片が出土している。
- ST05 トレンチ端で検出したため規模は不明であるが、長辺1.8mを測る。土師器片が出土している。
- 9トレンチ北部・10トレンチでは、柱穴と考えられるピット群が検出されたが、建物としてまとまるものはない。遺構面で土師器羽釜、ピット内より石鍋片が出土した。
- 11トレンチ 床土直下で地山となり、遺構・遺物は検出されなかった。
- 12トレンチ 床土直下に遺物包含層がみられ、下層の灰色砂質土を掘り込んで土坑2基・集石墓1基を検出した。

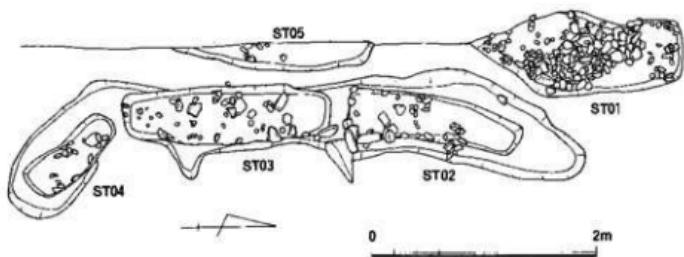


fig.10-12. 9トレンチ集石墓平面図

- 土坑 1** 不整形土坑で、深さ40cmを計る。埋土内には炭層がみられるが、遺物は出土しなかった。
- 土坑 2** 長径4.5m・短径1.5m・深さ40cmの長楕円形土坑で、断面形は逆台形である。底面は平坦で、径約5~10cmの小さなビットが検出された。小ビットは斜めに穿たれ、杭状の構築物であったと考えられる。埋土内からは、土師器片が出土した。
- 集石墓** 長径1.5m・短径1.2m・深さ35cmの楕円形土坑で、断面形は漏斗状である。土坑の北東部に河原石の集積がみられる。積石の間から須恵器鉢片が出土した。
さらに灰色砂質土を除去して地山面を精査した結果、柱穴数カ所を検出したが、建物としてまとまるものはない。
- 13トレンチ** トレンチ東端において集石造構の一部を検出したため、南北方向に拡張し、造構の性格を追求した。その結果、南北5m・東西3m以上の方形掘形内に、河原石が集積された状態で検出された。上面の河原石を除去して精査した結果、石敷溝2条・集石墓1基を検出した。
- 集石墓** 上部を石敷溝1に切られ、長辺3.7m・短辺1.2m・深さ35cmのプランを持つ。ほぼ平坦な底面の北よりに40cm大の河原石を据え、石材下に須恵器鉢を置いた状態で検出した。
- 石敷溝 1** 幅60cm・深さ10cm前後の溝で、上部に河原石の集積がみられる。石敷内から土師器皿が多数出土した。
- 石敷溝 2** 幅70cm・深さ15cm前後の溝で、上部に河原石の集積がみられる。石敷内から漆片が出土した。

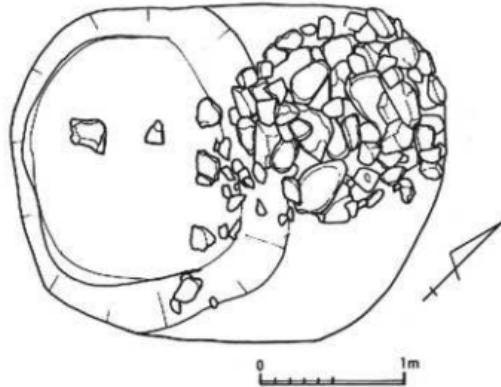


fig.10-13. 12トレンチ集石墓平面図

3.まとめ

真善坊・松本坊地区では、15~16世紀と考えられる基壇建物・瓦溜・石組み構造等が検出され、坊院の存在が想定された。また、段丘高位の字真善坊地区では江戸時代以降に坊院を取り壊して整地されて、なおも寺院の一部が営まれたことがあとづけられた。

垣内地区では、太山寺遺跡特有の中世・近世瓦の出土が皆無であり、当地区が太山寺の寺域からはずれていると考えられる。柱穴群が調査区北側に集中し、太山寺参道沿いに鎌倉時代後期~室町時代の集落が営まれたと推定される。集落と同時期の集石墓が集落の背後に近接して営まれている点が中世墓の立地を考える好資料となると思われる。



fig.10-14. 太山寺遠景

11. 長坂遺跡

1. はじめに

長坂地区土地改良（圃場整備）事業に伴い、事業対象予定地内に対し、これまでに遺跡の有無を確認するための試掘調査を実施してきた。その結果、今年度T.事予定の範囲内について、遺跡の存在することは明らかとなっていたが、事業予定地内の一部の圃場については未調査となっていたため、今年度試掘調査を追加し遺跡の範囲の確定を行った。

遺跡の大部分については、盛土などの対応が行われ保存されることになった。そのため保存が施工上不可能な排水路敷部分について発掘調査を実施することとなった。

調査の対象となったのは第20号支線排水路・第21号支線排水路・第22号支線排水路である。第20号支線排水路を1・2・3トレンチ、第21号支線排水路を5トレンチ、第22号支線排水路を4・6トレンチとに分けた。また、1トレンチについては、各圃場ごとにa～c区に分けて呼ぶことにする。



fig.11-1.
調査位置図

2. 調査の概要

1トレンチ

a～c区

a区については、床土を掘削したのち砂礫層が検出された。遺構・遺物の出土はなく伊川の氾濫原と考えられる。b区からc区にかけては、平安時代後半から鎌倉時代にかけての遺物包含層が確認され、溝状遺構S D01と土坑S K01が検出された。c区の東端で自然河道と考えられる大きな落ち込みが検出された。

- 2 トレンチ** このトレンチでは、平安時代後半から鎌倉時代にかけての遺物包含層を確認したが、遺構は確認されなかった。
- T.P. 1 は、耕土直下に平安時代後半から鎌倉時代にかけての遺物包含層が確認された。T.P. 2 についても床土直下で、同様の遺物包含層が存在した。遺構は柱穴やピットなどが確認された。遺物の出土量は比較的多く、遺構も検出されるなど、この付近に平安時代後半から鎌倉時代ごろの生活域が存在しているものと考えられる。
- 3 トレンチ** 遺構面は、安定した黄色粘土層で土坑 3 基と溝状遺構 2 条、ピットなどが検出された。溝状遺構（S D01）は、鎌倉時代ごろの遺物が含まれていた。土坑（S K01）からは、須恵器の出土ではなく土師器の甕や高壺の破片が出土しており、古墳時代前期の遺構ではないかと考えられる。その他の遺構からは、時期を確定したり遺構の性格を知る手掛かりになるような遺物の出土はなかった。
- 4 トレンチ** 遺構面は、3 トレンチの黄色粘土層から次第に小石を多く含む灰黄色の砂混じり土層へ変化していくが、ピット・溝状遺構・竪穴住居状の落ち込みなどの多くの遺構を検出することができた。
- 竪穴住居状の落ち込み（S B01・02）は、削平が著しく周壁溝なども確認することができず、竪穴住居とすることに若干の疑問の持たれるものである。出土遺物には土師器の小片が多く、時期の確定資料には欠けるものの、須恵器は含まれておらず、古墳時代前期頃のものと思われる。S X01 についても同様である。
- ピットからの遺物の出土は非常に少なく、その時期を明確にはできないが、S P05からは比較的多くの遺物が出土しており、S B01などと同じ古墳時代前期のピットと考えられる。
- 溝（S D01・02）は、ほぼ平行して流れるもので、埋土はともに灰色粘土であった。この中からは、中世の須恵器片などが出土している。
- 5 トレンチ** 遺構面は、北側では砂礫層が検出され、遺構は確認されなかったが、その砂礫層に至るまでに溝状遺構 3 条と土坑 2 基を検出している。溝状遺構 S D02 は、溝状遺構 S D01（断面 U 字形）にとりつくもので、この溝状遺構 S D01 からは多量の土器が出土しており、完形品も含まれていた。土坑 S K01 からも、溝状遺構 S D01 同様に多量の遺物が含まれていたが、どちらも遺構の性格については明らかにすることはできなかった。
- 6 トレンチ** このトレンチの遺物包含層は、非常に希薄なもので、出土遺物も少なかった。遺構も確認することはできなかった。

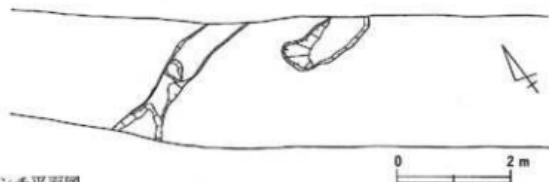


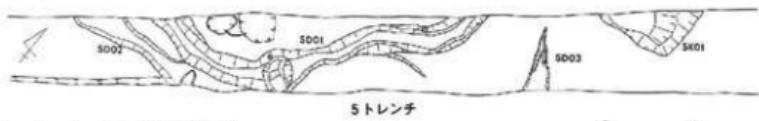
fig.11-2. 1トレンチ平面図



3トレンチ



4トレンチ



5トレンチ

fig.11-3. 3～5トレンチ平面図



fig.11-4. 4トレンチ全景



fig.11-5. 5トレンチ S D01

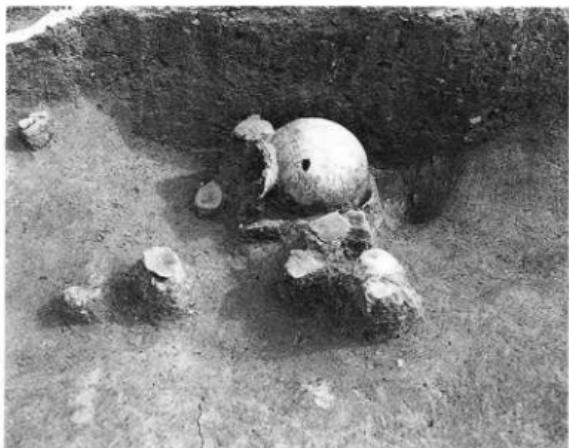


fig.11-6.

5トレンチS D01遺物出土状況

全体として遺物の出土は比較的少なく、出土遺物のほとんどは5トレンチの溝状遺構 S D01と土坑 S K01からの出土であった。この2つの遺構から出土した土器は、弥生時代の終末から古墳時代の初めにかけてのものと考えられる。また、4トレンチの遺構面からは、石鏃が1点出土している。

3.まとめ

今年度の調査においては、伊川や長坂川の氾濫の跡が随所に見られたが、多大な成果を得ることができた。5トレンチのS D01とS K01から出土した土器は、弥生時代の終末から古墳時代の初めにかけてのもので、各器種にわたっており、しかも多量に出土していることから良好な一括資料である。残念ながらこの時期の住居址は、今回の調査では確認されなかつたが、この付近に存在しているものと考えられる。また、当遺跡の南方の、同時期の集落遺跡である池上口ノ池遺跡との関連もうかがわれ、伊川谷が古墳時代へ移行する直前段階のものとしても、大変重要な遺跡である。また、中世においても、集落が営まれていたことを確認することができた。集落の範囲もより広範囲なものとなり、伊川谷の歴史を考える上でも貴重な成果を得ることができた。

いけがみくらのいけ 12. 池上口ノ池遺跡

1. はじめに

池上口ノ池遺跡は、明石川の支流である伊川の中流域左岸の段丘上に存在する。標高は約50m～60mで、沖積地との比高差は約30mである。

昭和51・52年に、池上地区の土地区画整理事業に伴い、池上口ノ池遺跡調査団によって調査が行われた。その結果、弥生時代中期後半の竪穴住居10棟、弥生時代末期の竪穴住居50棟、古墳時代中期の竪穴住居1棟、その他各時期の土坑、溝等が多数発見された。特に弥生時代の竪穴住居は、そ大半が火災に遇っており、また河川や平野を見下ろす台地の上という集落の立地から、「戦火に遇った村」として、大きく報道された。

土地区画整理が行われた後、池上口ノ池遺跡付近で唯一旧地形をとどめていた当地において病院建設が計画された。それに先立って試掘調査を実施した結果、弥生時代末の遺物包含層と、竪穴住居の一部が検出され、池上口ノ池遺跡の一部であることが明らかになった。今回の調査は、病院建設によって遺構が影響を受ける範囲について実施した。

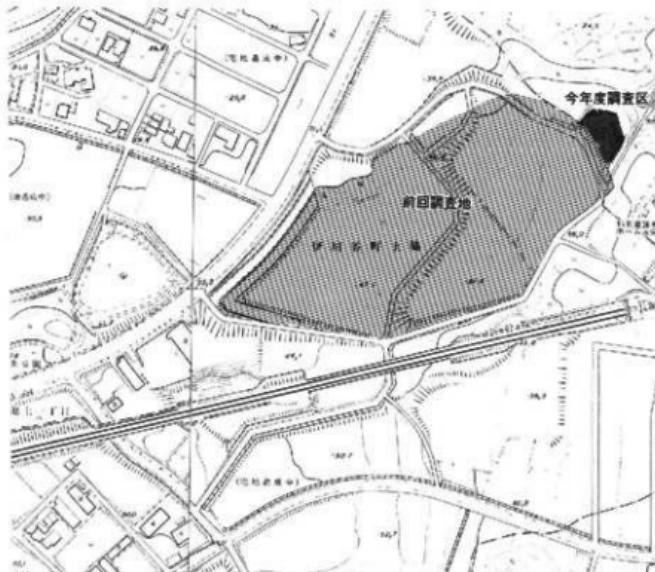


fig.12-1.
調査位置図



fig.12-2. 遺構配置図

2. 調査の概要 今回の調査では弥生時代末期の竪穴住居3棟と土坑・溝・ピット、古墳時代後期の墓址1基が発見された。

弥生時代末期 S B01 S B01は一辺5.9mの竪穴住居である。この住居址は火災に遇っており、埋土に炭化材、焼上が多数含まれ、床面も焼けている。北側半分は谷の鞍部で流出しており、また耕地造成時に上面がかなり削平を受け、周壁は全く存在しない。周壁溝は残存する3辺には存在する。また、ベッド状遺構も3辺に存在する。南辺のベッド状遺構の中央部には直径85cmで深さ25cmの土坑が存在する。この土坑は周壁溝と繋がっており、また、土坑から住居址内の内側に幅10cm・深さ5cm程の細い溝が伸びる。中央部には浅い土坑が存在する。柱は南側の2本が検出され、4本柱の建物と考えられる。遺物は主に周壁溝内より出土し、壺・壺・高杯が出土している。

S B02 6.8m×6.4mの方形竪穴住居である。残存度はよく、深さ約40cmである。壁際の4周に周壁溝が存在し、その内側に、地山を削り出して造られているベッド状遺構が存在している。住居址南辺の中央部にS B01と同様に土坑が存在する。またベッド状遺構の南東コーナー付近は、幅120cmと狭くなっている。ここが出入口と考えられる。主柱は4本の建物である。この住居址はほとんど火災に遇っておらず、僅かな炭と焼土が埋土内に存在したのみである。遺物は床面と周壁溝と南辺の土坑から計3点出土したのみで、その他は破片もほとんど出土しなかった。出土した土器は、壺2個と壺の底部の破片である。この住居址から、建物の外の西側と東側に細い溝が検出された。この溝は、住居址の雨水を外に流すための溝であると考えられる。また住居址のすぐ近くに、0.9×1.2mの楕円形の焼土坑(S K 07)が存在し、住居址内には中央土坑が存在しないことから、屋外炉の可能性がある。

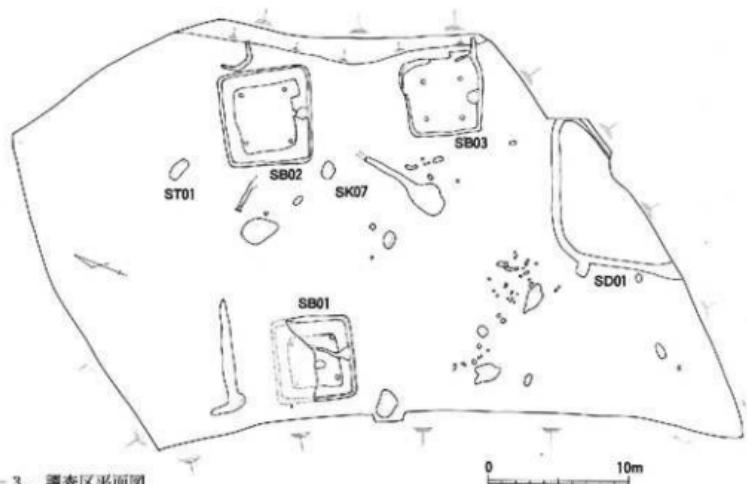


fig.12-3. 調査区平面図



fig.12-4. SB01



fig.12-6. SB02



fig.12-5. SB03炭化材検出状況



fig.12-7. SD01

SB03

一辺5.5mの方形堅穴住居で、耕作造成時に削平を受けたものと考えられ、深さ18cmと、残存度は悪い。この住居も火災に遇っており、炭化した建材が一部検出された。

周壁溝は壁際の4周にめぐり、南辺にはSB01・02と同様に土坑が存在し周壁溝と繋がる。SB01・02と違いベッド状造構は存在しない。床面には幅約15cmの溝がある。中央部には浅い土坑があり、炭・焼土が埋まっていたが、かすであるのか火災によるものかは判別しがたい。

東辺の南東コーナー付近に突出部があり、出入口であると考えられる。周壁溝は、この突出部より屋外に続いている。

炭化材は、南側に特に多く残っていた。そのほとんどが垂木で、主柱も一部炭化して残っていた。棟木らしきものは残っていなかった。

遺物は、小型の甕、高坏が出土した。その出土位置は床面ではなく、炭化材のレベルとほぼ同じか、それより上である。このことから出土した遺物は、屋内の棚のようなものの上に置かれていた可能性がある。

SD01

幅40cm～60cm・深さ15cm～20cmのL字形に曲がる溝で、調査区南端で検出された。調査区の南側と東側は崖や道で削られているため、全体の形状は明らかでない。屈曲部付近に突出部がある。

遺物は屈曲部のすぐ東側に甕が数個体分が集中して出土した。その他、埋土中より高坏・甕が出土している。

古墳時代後期

ST01は調査区の北半で検出された古墳時代後期(6世紀前半)の墓址である。かなり削平を受けているため原形は明らかでないが、残存する形状は長さ1.6m・幅0.7mの変形した長方形で、深さは約5cm程度である。長軸の方向は北西-南東を向く。

掘形内の西隅から須恵器の坏身2点と坏蓋2点、土師器の壙1点が出土した。坏身と坏蓋はセットではなく、全て口を上向きに置かれていた。

木棺の痕跡は明らかにされなかつたが、大きさ・形・遺物の出土状態等を同時期の墓址と比べてみて、木棺直葬墓と考えられる。



fig.12-8. ST01

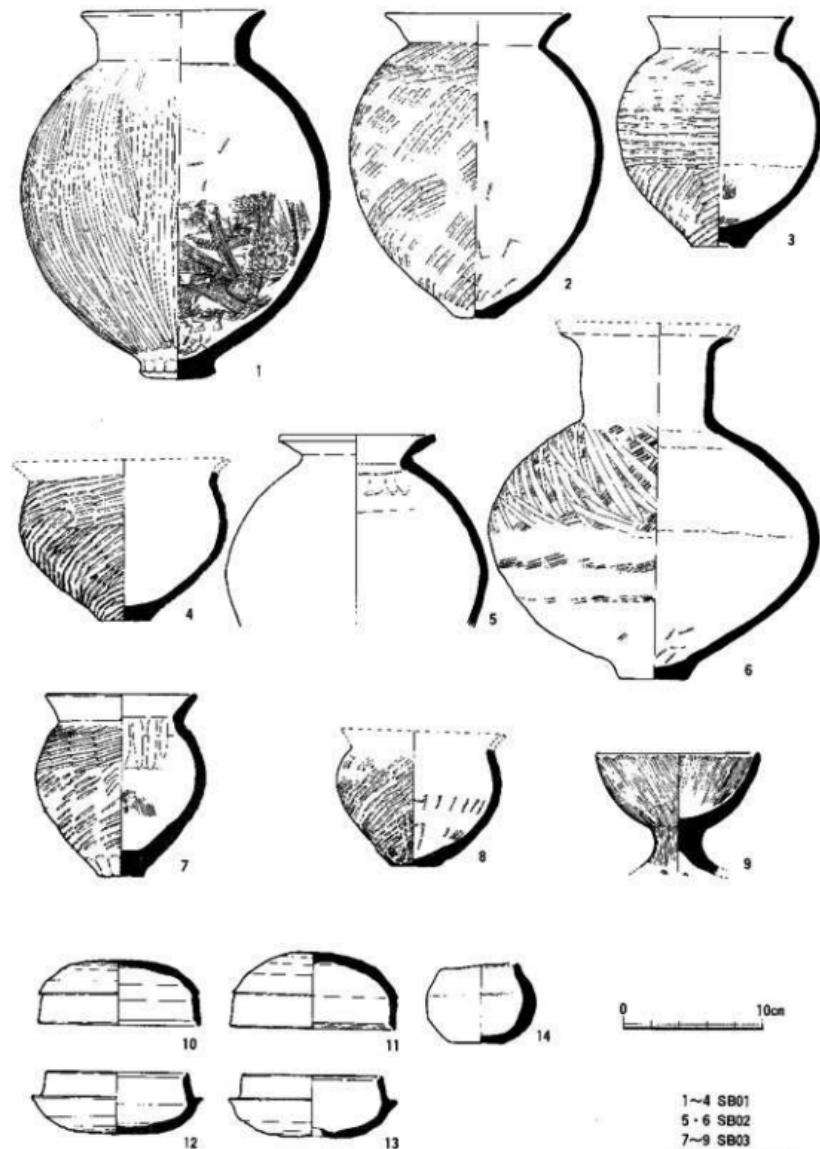


fig.12-9. 遺物実測図

1~4 SB01
5・6 SB02
7~9 SB03
10~13 ST01 瓢箪器
14 ST01 土器片

3. まとめ

今回の調査で発見された遺構は既述のように竪穴住居3棟と、土坑・溝・ピット・木棺墓である。竪穴住居等の時期は既に弥生時代末期と述べているが、いわゆる庄内併行期である。しかし、典型的な庄内式土器は全く出土せず、すべて弥生土器幅年の畿内第V様式の系譜を引く土器である。明石川流域においては、下流の吉田南遺跡で庄内式土器が出土しており、それより上流の当遺跡ではその出土が見られず、V様式系の在地の土器様式のものだけが出土している。

S T01は前回の調査も合わせて、唯一の古墳時代後期の遺構である。これは墳丘を持たない古墳時代の木棺直葬墓であるが、同様の遺構は、明石川流域の西神第38地点遺跡や、西神第90地点遺跡で発見されている。しかし、今回見つかったS T01を含め3基の木棺墓には、時期・規模・副葬品等の差異があり、被葬者等の性格を見極めるには、今後の発見例の増加を待たねばならない。

また今回の調査では、弥生時代中期後半の遺構は全く確認されず、遺物もほとんど出土しなかった。このことから、この時期の住居址は当遺跡の西半に集中していたことが分かる。

以上のように、当遺跡は、弥生時代中期後半と末期の集落址、古墳時代後期の墓址からなる遺跡であったが、今回の調査で、この遺跡内が全て調査され、集落内の住居の構成等を知る上での貴重な資料が得られた。



fig.12-10.
調査区全景

てんのうざん 13. 天王山古墳群

1. はじめに

天王山古墳群は、昭和45年の分布調査により18基の古墳の存在が推定され、昭和47年の試掘調査によって、そのうち4基の古墳の規模などが判明した。

昭和55年に天王山1・1-2・2・3・4号墳を含む開発計画に伴い、4号墳の全面調査を実施した。その結果、4号墳は2基の割竹形木棺を埋葬施設とする南北約19m・東西約16mの方墳であることがわかった。

昭和61年に、5号墳が盗掘を受けたため、応急処置として中央棺を中心とした調査を実施した。今年度は開発計画に伴い、5・6号墳と16地点参考地の全面調査を実施した。

2. 調査の概要

先年から確認していた5号墳とは別に、その西側に6号墳を検出した。さらに、中世の土坑数基を検出した。

16地点参考地については、数基の土坑を検出したが、時期や性格は不明である。



fig.13-1. 調査地位置図

天王山古墳群一覧

古墳名	墳形	規模	埴輪	埋葬施設	副葬品	時代
1号墳	円	直径約10m、高さ約1.2m	円筒	?	?	6世紀前半
1-2号墳	円	直径約10m、高さ約0.6m	?	?	?	6世紀?
2号墳	円	直径約14.5m、 高さ約1.3m	円筒	?	?	6世紀前半
3号墳	帆立貝式 2段築成	直径約20m、高さ約2.5m 幅10m、 高さ5mの造り出し	円筒、盾、馬、人物	?	?	6世紀前半
4号墳	方	南北約19m、東西約16m、 高さ約3.3m	なし	(1号室) 割竹形木棺 高さ 5.4m 最大幅 0.6m	管玉2、ガラス玉5、鉄刀2、ヤリ ガンナ1、鏡先1、 鉄斧1	4世紀
				(2号室) 割竹形木棺 高さ 5.4m 最大幅 0.5m	八角鏡1、管玉5、 ガラス玉16、ヤリ ガンナ1、鏡先1	4世紀
5号墳	方	辺約20m、 高さ約2.0m	なし	(東棺) 組合式石棺 高さ 2.7m 最大幅 0.6m	?	4世紀
				(中央棺) 割竹形木棺 高さ 5.2m 最大幅 0.6m	鉄劍1 土師器片1 他は不明	4世紀
				(北棺) 割竹形木棺? 高さ 4.2m? 最大幅 0.5m	針状鉄器1 ガラス玉6	4世紀
				(南棺) 割竹形木棺 長さ 4.2m 最大幅 0.5m	ガラス玉3	4世紀
6号墳	方	一边約8m 高さは墳丘流失のため 不明	なし	(南棺) 箱形木棺 長さ 2.3m 最大幅 0.6m	須恵器壺蓋2 鉄鎌13本 鹿角裝刀子2	6世紀後半
				(北棺) 箱形木棺 長さ 1.8m 最大幅 0.6m	須恵器壺身1 耳環1	6世紀後半

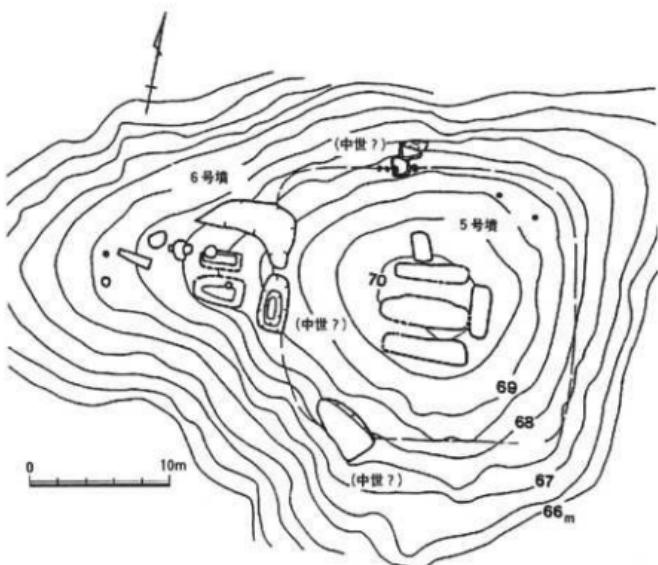


fig.13-2.
調查地平面圖

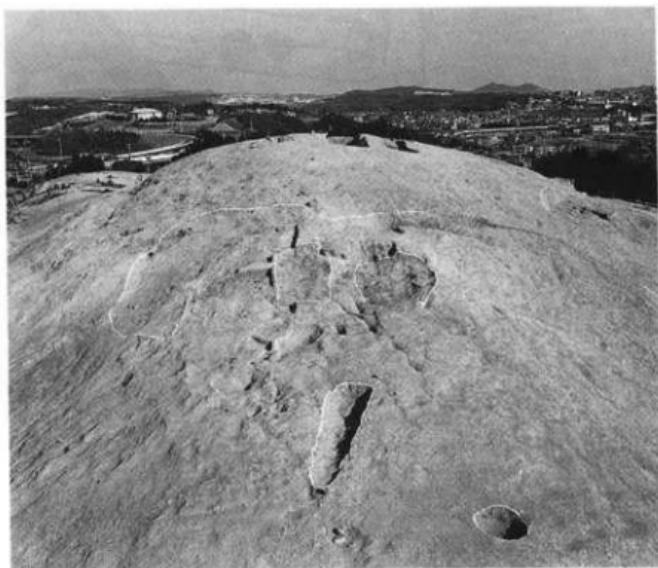


fig.13-3.
調查地全景

5号墳

墳丘

尾根の地形を利用し、その最高所を削り出して古墳として形を整えたもので、盛り土は確認していない。北辺で墳丘を区画するための平坦面が残っていたものの、墳丘の大半は流出している。そのため正確な規模は確定できないが、南北約19m・東西約16mの方墳であったと推定できる。

外表施設として、葺石や埴輪はない。墳丘北側斜面から土師器の小型丸底壺が出土している。

埋葬施設

4基の埋葬施設がある。

主軸を東西の方向に向ける、長大な木棺を納めた埋葬施設が3基（中央棺・南棺・北棺）あり、その東に、主軸を南北の方向に向ける組合式石棺（東棺）がある。

北棺

東西5.0m・南北1.1m・深さ0.4mの墓坑に長さ4.2m以上・幅0.6mの割竹形木棺あるいは箱形木棺の痕跡を確認した。

肉眼では赤色顔料を確認できなかった。棺底の中央東寄りから針状鉄器1点と西寄りからガラス玉（紺色5点、緑色1点）が出土した。

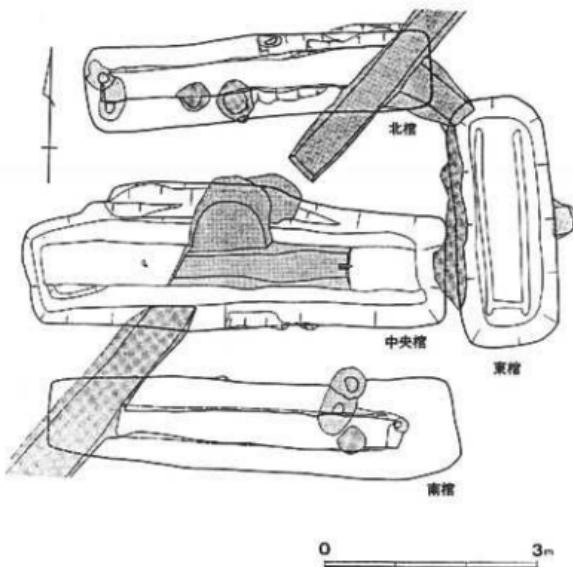


fig.13-4.
5号墳埋葬施設平面図

東棺

盗掘により石棺は完全に破壊されて、古墳周辺にはばらまかれていた。しかし、墓坑に残された痕跡から、石棺が置かれていた状況は推定することができた。

墓坑は、長さ3.4m・幅1.3m・深さ0.7mである。蓋石と側石の一辺がそれぞれ3枚、小口石が各1枚、底石が4枚、合計15枚の板状に加工した凝灰質砂岩を組み合わせている。内寸は全長2.3m、幅0.45mである。棺内には石棺と同じ石材でつくられた石枕を置いている。石枕の全面と、棺の内面に赤色顔料が塗られている。

なお、盗掘の排土から紺色のガラス玉1点が出土している。中央棺あるいは東棺の遺物と考えられる。

南棺

東西5.7m、南北1.3m、深さ0.5mの墓坑に長さ約4.2m・幅0.6mの断面U字形の割竹形木棺の痕跡が確認された。

棺底の中央やや西寄りから、ガラス玉（紺色3点）が出土している。部分的ではあるが、棺底に赤色顔料が部分的に薄く残っている。

中央棺

東西5.9m・南北2.0m・深さ1.0mの墓坑に、長さ5.2m・幅0.6mの割竹形木棺を納めている。

この墓坑の埋め土は非常に堅かったため、木棺が腐朽した後も棺上部の土が一部を除いてくずれ落ちていない。そのため棺自体は残存していないが、墓坑の埋め土の形状から棺の断面が円形であったことがわかる。棺底には、赤色顔料が残っていた。

棺の中央部が盗掘されていたが、盗掘をまぬがれた部分から鉄剣と土師器片が出土した。鉄剣の切先は東に向いていた。棺底には赤色顔料の広がりが2層残っていた。



fig.13-5.
5号墳埋葬施設

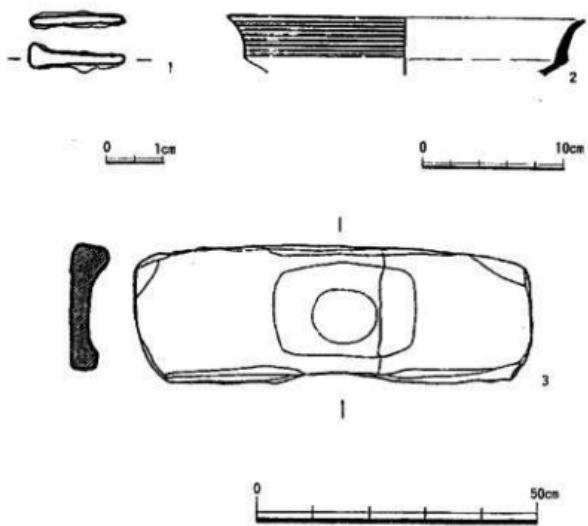


fig.13-6. 遺物・石枕実測図

6号墳

墳丘

墳丘のほとんどが流出し、盛土はわずかに残っているだけである。しかし、墳丘の北東部に周溝が残っており、その形状から一辺約8mの小規模な方墳であることがわかる。葺石や埴輪は出土していない。

埋葬施設

東枕の埋葬施設を2基検出した。

南棺

東西3.5m・南北1.8mの墓坑に、長さ2.3m・幅0.6mの箱形木棺を納めている。棺の東で須恵器の壊蓋2個体が、ふせて重ねた状態で出土している。これは転用枕と考えられるため、頭位を東に向けていたと考えられる。副葬品は、遺骸の右側にそえられている。頭部付近に鹿角袋刀子1本、胴部から足元にかけて鐵鏃2束、鹿角袋刀子1本を検出した。

北棺

東西3.5m・南北1.2mの墓坑に、長さ1.8m・幅0.6mの箱形木棺を納めている。木棺の両小口部分を粘土でおさえている。

棺底の東寄りで耳環1点が出土した。その他には、木棺の上に置かれたと考えられる須恵器壊蓋が1個体出土している。

周溝

周溝底から、耳環1点と鉄斧が1個体分出土している。

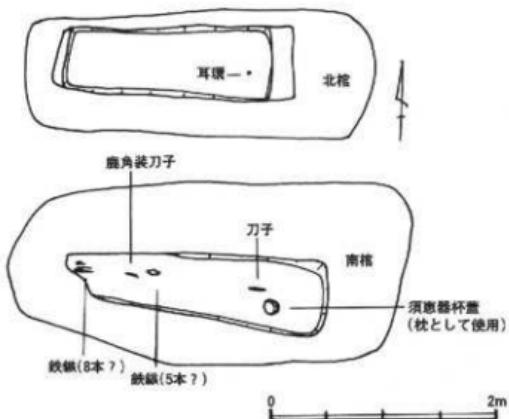


fig.13-7.
6号墳埋葬施設平面図

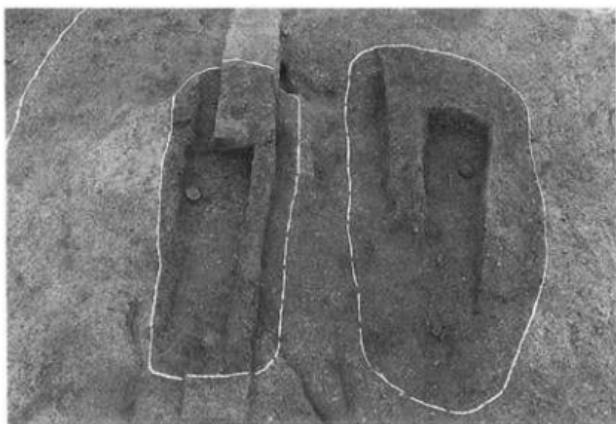


fig.13-8.
6号墳埋葬施設

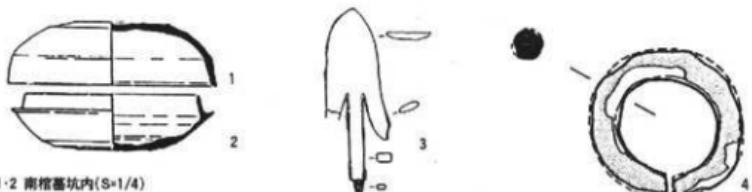


fig.13-9. 6号墳遺物実測図

3. まとめ

5号墳では、長大な木棺をもつ埋葬施設3基と石棺をもつ埋葬施設1基を検出した。3基の木棺はほぼ平行してすえられ、墓坑の東端も位置がそろっている。このような配置から、この3基はほぼ同時に企画性をもって営まれていたものと考えられる。このなかで中央棺は長さ5.2mを測り、割竹形木棺直葬としては、兵庫県下で最大級のものである。

また、この3基の後に営まれたと考えられる東埋葬施設の石棺も長さ2.6mを測り、組合式石棺としては県下最大級である。

出土した副葬品が少なかったため、その組み合わせから5号墳の築造年代をもとめることは困難である。しかし、埋葬施設の様相や、墳丘北側斜面から出土した小型丸底壺の型式からは、この古墳が古墳時代前期のものであることが推定される。

6号墳の埋葬施設から、それぞれ6世紀後半の須恵器が出上しており、当該期に築造されたことがわかる。

16地点参考地は、地形的には古墳である可能性も考えられたが、墳丘を画した痕跡もなく、頂部からは時期不明の不定形な土坑を数基検出ただけであり、古墳とは認められない。

なお、6号墳についてはすべての調査を完了したが、5号墳については、埋葬施設を移築保存するため、掘形は完掘せず、部分的な断削りを行なうにとどめた。



fig.13-10.
調査地遠景

しらみずひさこづか
14. 白水瓢塚古墳

1. はじめに

白水瓢塚古墳（白水妻塚古墳）は、伊川右岸の標高約60mの薬師山山頂に位置し、前方部を西方に向けた前方後円墳である。海岸からの直線距離は約3.5kmである。当古墳は、直良信夫氏によって詳細な踏査記録が報告されており、その調査記録によると、墳丘に3段の埴輪列が存在することや、この埴輪列の中に格円形円筒埴輪が混在していることが報告されている。また、古墳の周囲には100基にもおよぶ合口式の埴輪円筒棺が存在したと推定されている。

今回は、白水瓢塚古墳の墳丘規模・形態の把握と埴輪円筒棺の有無を確認するためのトレンチ調査を実施した。

2. 調査の概要

今回は、幅1mのトレンチを白水瓢塚古墳本体とその周辺、南東方向へ延びる尾根に適宜設定して、調査を実施した。

墳形と規模

1トレンチ～13トレンチの調査成果から、下記のように白水瓢塚古墳の規模が確認できた。

全長 57m 後円部径 31m 後円部高 5m

前方部長 28m 前方部幅 16m 前方部高 2m

墳形はやや歪んだ後円部に、まっすぐ延びる前方部をもつ、いわゆる柄鏡形の前方後円墳で、少なくとも2段に円筒埴輪列を巡らせることができた。しかしながら、葺石・周溝等の外部施設は全く確認できなかった。

また、墳丘の築成については、ほとんどが地山を削り出しているようであるが、前方部の上半については盛土の可能性がある。



fig.14-1.
調査地位置図

円筒埴輪列

墳丘に原位置を保ったまま検出できた埴輪は下表のとおりで、合計13本であった。

トレンチ名	検出位置	埴輪の種類	直径(cm)	個数	備考
2	墳丘裾	円	40	1	
5-9	墳丘中段	円 楕 円	30 40×25	7 2	掘形は10本分検出
10	墳丘中段	楕 円	40×25	1	
11	墳丘裾	円	45	1	
12	墳丘裾	円	45	1	

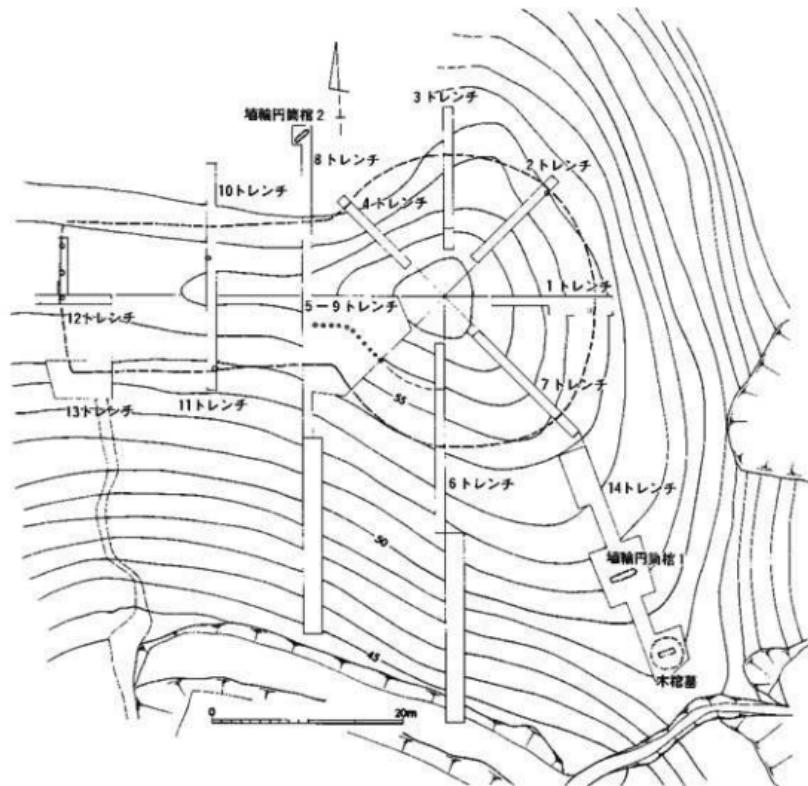


fig.14-2. 調査トレンチ・遺構配図

墳丘中段と考えられる埴輪列には配列に規則性が認められないものの、直径30cmの正円形円筒埴輪と楕円形円筒埴輪とを混在させて、0.7~0.9m間隔で樹立している(5~9トレンチ)。また、墳丘裾は中段よりも大型の直径40~45cmを測る正円形円筒埴輪(朝顔形?)を心々距離2.8m間隔で樹立していたと推定できる(12トレンチ・12トレンチ拡張区)。

なお、後円部・前方部ともに直良氏が報告されている上段にあたる埴輪列は確認できなかった。

それぞれの円筒埴輪の樹立方法についてみると、埴輪No.1~10、13は地山面を掘り込んで樹立されているが、埴輪No.11、12については明確な掘形が確認できなかったため、不明である。

その他の埴輪

各トレンチから量の多寡はあるものの、さまざまな埴輪片が出土している。中でも、5~9トレンチでは墳丘裾での出土量が傑出しており、円筒埴輪片に混じって盾形埴輪片数点が含まれている。

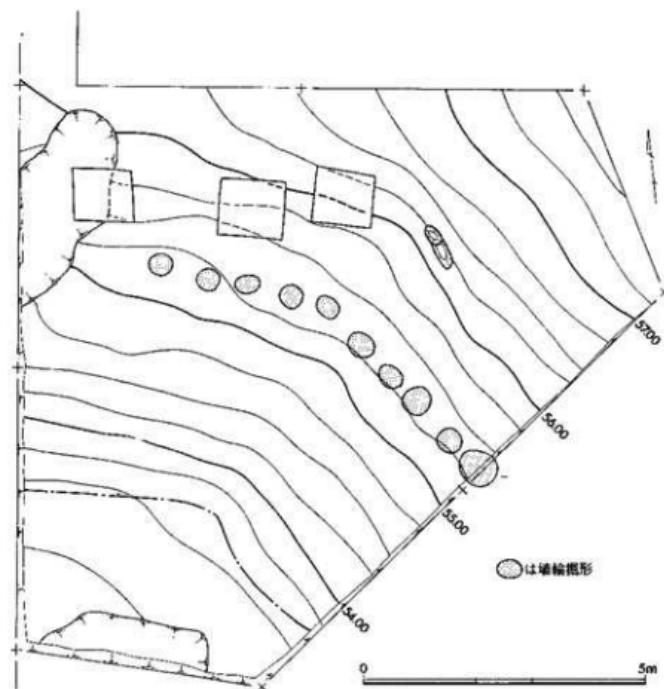


fig.14-3. 5-9トレンチ実測図

埴輪円筒棺 8 ドレンチ 3 区、14 ドレンチ 2 区で各 1 基ずつ確認した。
埴輪円筒棺 1 8 ドレンチ 3 区で確認したもので、埴丘裾からの距離は約 9 m である。

腐植土と黄灰色砂質土を除去した段階で棺の上面を検出した。

棺の掘形は二段で、上段は最大長 270cm・最大幅 100cm・深さ 10cm を測るいびつな瓢箪形をしており、やや南に偏した状態で最大長 205cm・最大幅 55cm・深さ 15cm の隅丸長方形の下段掘形が営まれている。

埴輪円筒棺は長径 45cm・器高 85cm の梢円形円筒埴輪を 2 本使用し、口縁部を合口式とするものである。三角形の透孔の閉塞は行われていなかった。小口の閉塞については、北小口が石材を 3 個立てて、さらに外側から別個体の円筒埴輪片で閉塞している。南小口は石材を 1 個使用し、さらに外側から別個体の円筒埴輪片で閉塞している。

棺内・棺外ともに副葬品は確認できなかった。



fig.14-4.
埴輪円筒棺 1
上面検出状況



fig.14-5.
埴輪円筒棺 1
底面検出状況

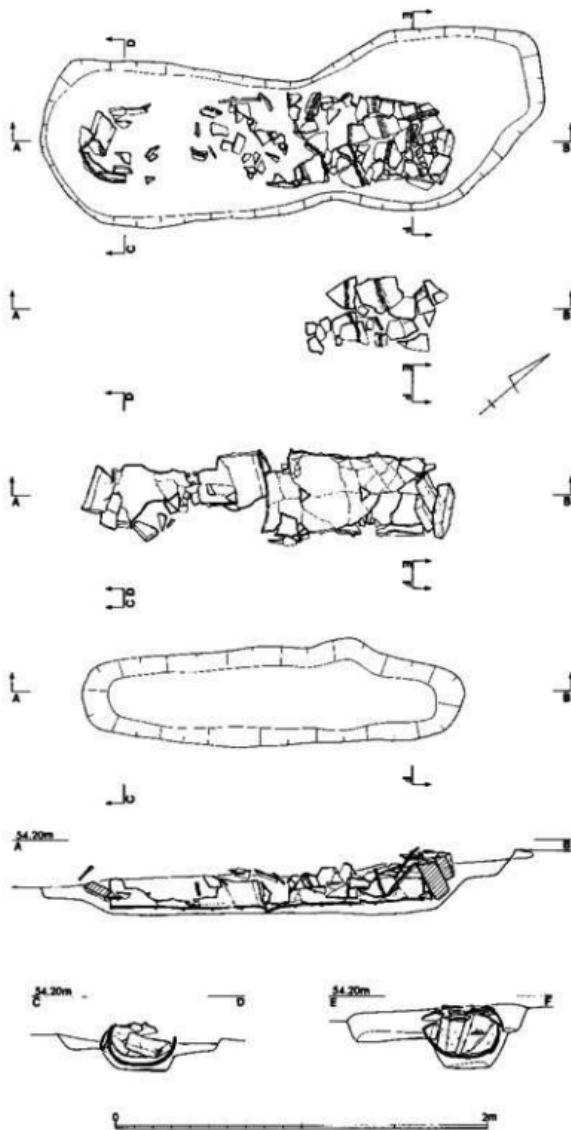


fig.14-6. 墓輪円筒棺1出土状況実測図

埴輪円筒棺2

14トレンチ2区で確認したもので、墳丘裾からの距離は約18mである。棺の掘形は、長さ260cm・幅65cm・深さ30cmの開丸長方形である。埴輪円筒棺の本体は朝顔形円筒埴輪の口縁部を打ち欠いたもの（直径45cm・器高110cm）を2本用いている。基底部を合口式としており、打ち欠いた口縁部を使って、両小口を閉塞している。特に、西側小口は遺存状態が良好で丁寧である。また、三角形の透孔の閉塞は西棺の1ヶ所で認められた。副葬品は、棺外で鉄製品（全長約5cm）が1点出土した。出土状況は、やや地山面より浮いた状態であった。



fig.14-7.
埴輪円筒棺2
上面検出状況



fig.14-8.
埴輪円筒棺2
底面検出状況



fig.14-9.
埴輪円筒棺2
棺外鉄製品
検出状況

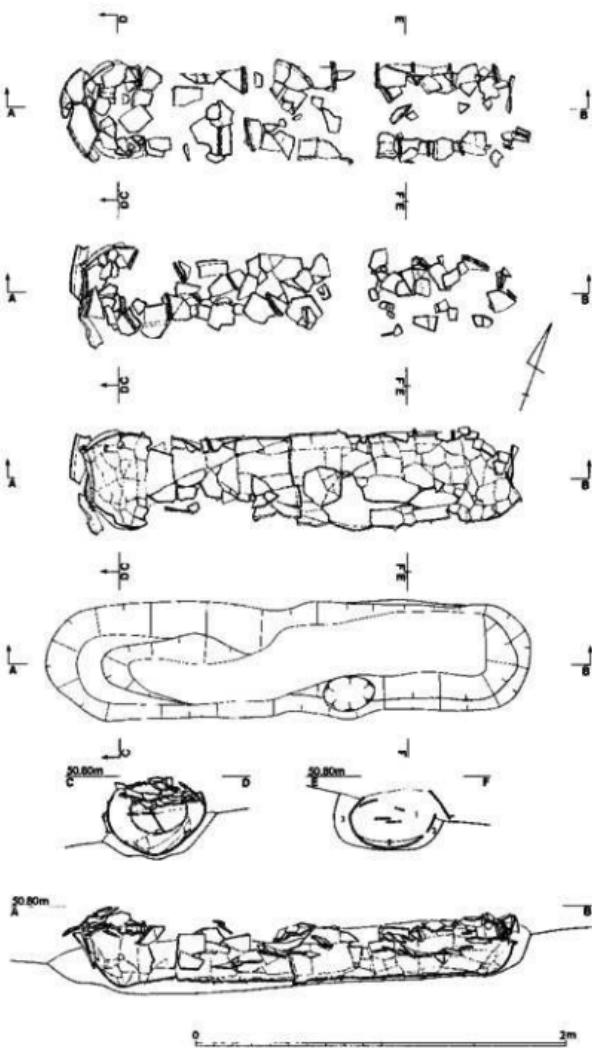


fig.14-10. 墓室内筒棺2出土状况复测图

その他の遺構

14トレンチ3区で木棺墓を1基確認している。現況で直径約5m程度のマウンドが認められた地点である。

腐植土層を除去すると、全面が須恵器の壊片を含む赤黄色粘質土の盛土で覆われており、これを除去すると棺の痕跡が確認できた。断面より復原すると、直径3m・高さ0.3mのマウンドとなる。棺は高さ205cm・幅80cm・深さ20cmを測り、棺内遺物は全く確認できなかった。

盛土内から出土した須恵器から5世紀末～6世紀初めに営まれたと考えられる。

3.まとめ

埋葬施設が未調査のため、白水瓢塚古墳の年代を推定するには、出土した埴輪が唯一の資料となる。そこで、古墳本体の埴輪で全容の窺えるものがないため、埴輪円筒棺1・2の埴輪を資料として扱うこととする。

埴輪の形態には、先にも記したように朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪・桔円形円筒埴輪・盾形埴輪がある。それぞれの調整についてみると、概して1次・2次調整ともに縦ハケ調整で、基底部外面に若干横ハケ調整が認められる程度である。また、タガの突出度は強い。朝顔形円筒埴輪は壺形部の球形体部を残す形態のもので、成立期のものに近いことが判る。桔円形円筒埴輪は畿内においても類例が10例程度の特異なもので、いずれも当古墳のものより大型のものと言え、直接比較することはできないものの、他の古墳と比較してそれほどの時期差があるとは考えられない。

すなわち、埴輪の特徴からみると、従来の編年観から古墳時代前期後半の中でも新しい時期に比定して大過ないと思われるが、より詳細な検討が必要であろう。

次に、埴輪円筒棺であるが、今回の限られた調査でも2基を検出していることから、かなりの数が白水瓢塚古墳周辺の緩斜面地に営まれていたものと推定される。また、直良氏が調査された際の第4号合口棺では、棺内より櫛・勾玉・管玉・土製小玉？・骨片等の遺物が出土しているものの、時期を比定できる資料を今回の調査では検出できなかったため、白水瓢塚古墳の築造との時期差は明確にできなかった。

さらに、派生する問題点は明石川流域における最古段階の前方後円墳である白水瓢塚古墳と周辺の古墳文化を考えていく上で多数考えられるが、今後より詳細な比較検討を通して、改めて考えていきたい。

15. 五色塚古墳

1. はじめに

これまで実施されてきた、史跡五色塚古墳周辺の調査によって、五色塚古墳の堀の外側に周溝の存在することが明らかとなっていた。そのため、今回マンション建設に伴なう現存道路の拡幅が行われることに伴い、その周溝の一部に影響が及ぶことが予想された。そこで、その拡幅部分について発掘調査を実施することとなった。

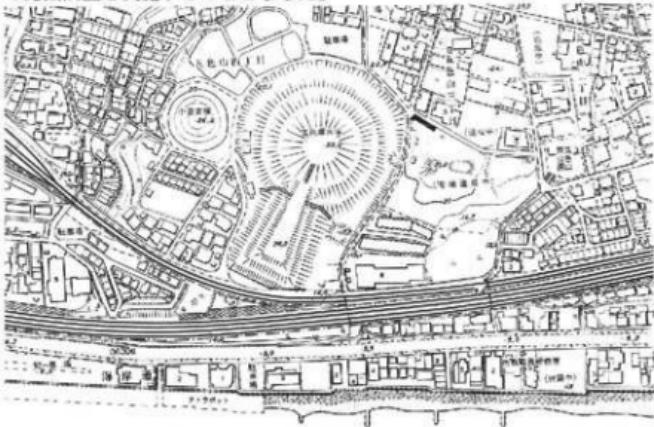


fig.15-1.
調査地位置図



fig.15-2.
調査地遠景

2. 調査の概要

この地点が旧舞子病院の門の近くであることから、一部に門の基礎などによる攪乱を受けてはいたものの、周溝は比較的良好に保存されていた。基本層序は、第1層・現代の盛土および攪乱、第2層・旧表土層、第3層・黄褐色砂質土となり、地山へ至る。その地山を切り込んで周溝が掘削されていた。周溝内は4層に分層されるが、大きく上層・下層の2層に分けることができる。上層には埴輪片・土師器片を多量に含むが、下層ではそれらの遺物をほとんど含まず、円窓を多量に含んでいたためである。

周溝は、幅約6.5m・深さ約0.3mを測るもので、五色塚古墳の堀に沿うような形で確認された。遺物は、埴輪片や土師器片が周溝内埋土上層や周溝内埋土下層上面において多数検出された。また、周溝上面において玉縁状の口縁を有する白磁片や須恵器の塊の口縁が出土しており、この周溝が鎌倉時代にはすでに埋没していたことを示している。

出土した埴輪は、今回はすべて円筒埴輪で朝顔形埴輪や形象埴輪は確認されなかった。土師器は壺の破片がほとんどである。



fig.15-3. 遺物出土状況



fig.15-4. 遺物出土状況細部①

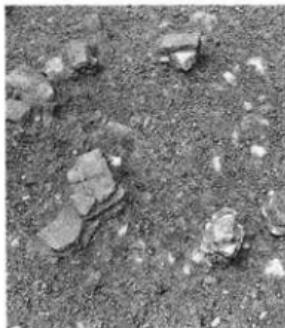


fig.15-5. 遺物出土状況細部②

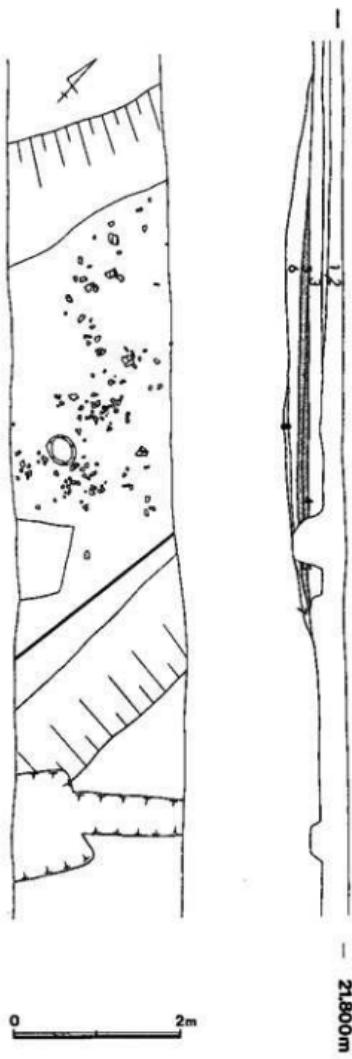


fig.15-6. 周溝内遺物出土状況平面図

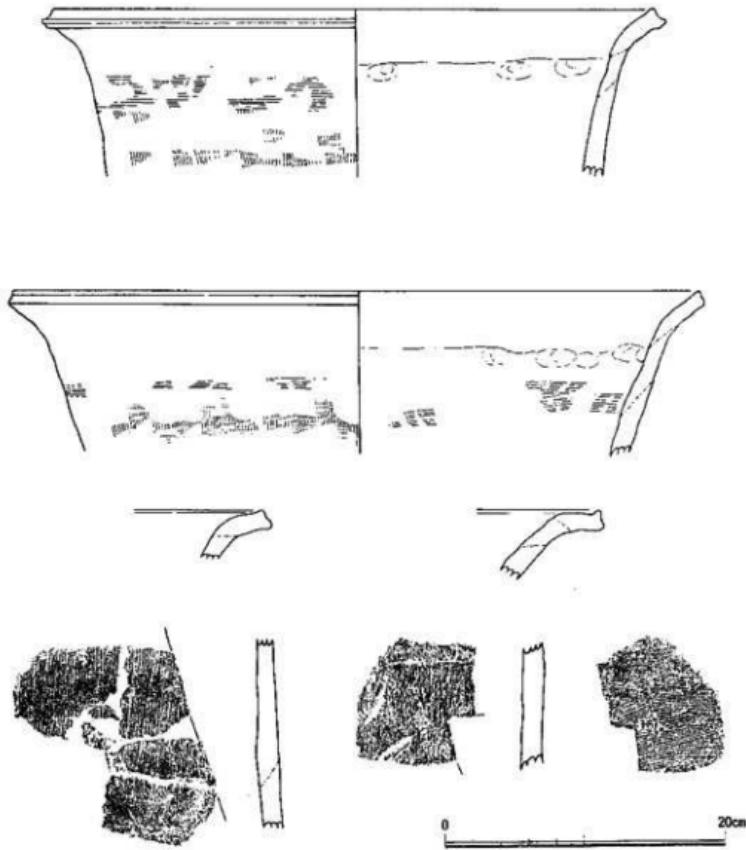


fig.15-7. 周溝内出土埴輪実測図

3.まとめ

今回の調査においても、五色塚古墳の壇に沿う周溝が確認され、周溝内からの埴輪の出土などとあわせて、従来の知見を再確認することとなった。しかし、出土遺物などの細かな点においては、各地点ごとに差が認められ、今後五色塚古墳を考えていく上で、これまでの調査成果とあわせて大変重要である。

この周溝は、調査終了後真砂土による埋め戻しを行い、地下に保存されることとなった。

16. 戻町遺跡

I. はじめに

戻町遺跡は須磨区戻町を中心に広がる遺跡で、昭和62年3月18日に実施した試掘調査によって初めて発見された。この試掘調査では、弥生時代中期の遺物包含層が検出されている。

周辺の遺跡の代表的なものには、北西約1kmの標高100mの丘陵上に位置する得能山古墳（古墳時代前期の円墳）、柵に囲まれた掘立柱建物が検出された松野遺跡（古墳時代後期）や弥生時代後期～平安時代まで続く集落として知られる神楽遺跡などがある。

また、昭和61～62年度にかけて、再開発事業に伴って調査を実施した長田神社境内遺跡が北東約2kmに位置する。弥生時代後期後半を中心とする時期の集落遺跡で、ベット状遺構を伴う六角形と推定される竪穴住居などが確認されている。



fig.16-1. 調査地位置図

II. 第1次調査

1. 調査の概要

調査地は戻町3丁目に所在し、現地表で標高約14mを測る妙法寺川の左岸に位置する。調査は店舗兼住宅のビル建築に先立つもので、調査対象面積は約470m²である。今回の調査では、弥生時代を通しての4時期にわたる遺構面を確認した。

第4遺構面

現地表下約2mで検出した遺構面である。

水田址

調査地区の東半分は、上面で検出した河道によって削平されているものの、約200m²の調査区において畦畔によって方形に小区画された水田址を合計36枚確認した。

畦畔

南北方向の畦畔は等高線に直行するように幅25cm・高さ5～10cmを測る

もので、7本検出された。また、等高線に平行する東西方向には、これよりやや小型の畦畔を適宜設けている。これらの水田址は淡黒灰色極細砂質シルトを基盤層としており、水田耕土は暗灰色の粘土層からなり、ほぼ10cmの厚みを保っている。また、畦畔を構成する土は水田耕土と同質で、炭粒をやや多く含む程度のものである。

規模 水田址一枚の規模についてみると、最大のものは $4.32 \times 2.16\text{m}$ (9.33m^2) で、最小のものは $2.50 \times 1.28\text{m}$ (3.20m^2) で、平均では 5.51m^2 となる。

水配り 水配りは、溝状造構等の水路跡と考えられるような造構が検出できなかつたため、明らかにし難いが、恐らく、北から南への緩やかな傾斜に沿つた「田越し」による配水を行っていたものと推定できる。

なお、プラント・オバールの分析調査報告によると、この水田址において約30年間にわたって稲作が営まれていたと推定されている。

時期 最後に水田址の時期については、上述したように、前期後半の河道によって切られていることから、前期後半を下らないことは明白であるが、伴出遺物が全く存在しないことから前期後半以前と言及しておくのが妥当であろう。

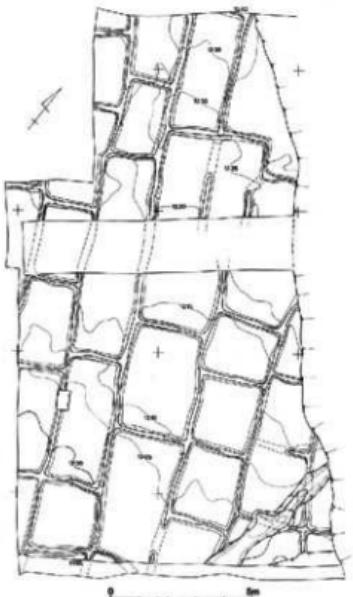


fig.16-2. 水田址平面実測図



fig.16-3. 水田址全景①



fig.16-4. 水田址全景②

第3造構面

現地表下1.5mで検出した造構面である。

主な遺構には調査区西半の土坑10基、溝状造構2条、ピット23ヶ所などがあり、東半には、河道と河道下層上面で検出した円形杭列造構などがある。

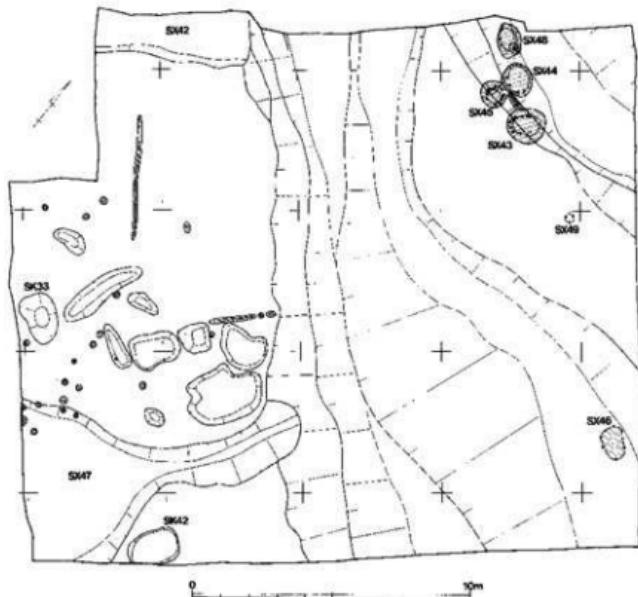


fig.16-5.
弥生時代前期
後半の造構平面図

SK33 S K 33はA-2・3区で検出した南北1.9m・東西1.3m・深さ50cmを測る2段に掘り込まれたスリ鉢状を呈する土坑である。出土遺物はいずれも小片であるが、壺・甕などがある。

SK42 S K 42はA-B-4区で検出した東西2.5m・南北1.6m・深さ40cmを測る土坑で、その断面形態より貯蔵穴と考えている。出土遺物には、弥生土器（壺・甕など）とともに、結晶片岩製石棒・砥石・磨製石庖丁・サヌカイトなどの石製品や獸骨片がある。

河道 東半で検出した河道は最大幅14.5m・深さ2.4mを測るもので、大きく分けると2度の洪水によって埋没していくものと考えられる。

当初、河道は東西方向に流れているようであるが、西肩のみしか検出できていないため、明らかにできない。

1度目の洪水による埋土（河道下層）は黄色砂を中心とし、多量の弥生土器（壺・甕・鉢）とともに、磨製石庖丁・縄文土器（晩期後半）・広鉗・



fig.16-6. 弥生時代前期後半の遺構



fig.16-7. 円形杭列遺構と広鉢未製品

編み物状木製品などを含んでいる。そして、この洪水が安定した時期に黃色砂上面を基盤層として円形杭列遺構と呼称している遺構が6基営まれている。

円形杭列遺構

S X 43~45・48は杭の本数に違いが見られるものの、同形態を探り、円形の上坑状落ち込みの斜面に内傾して杭を打ち込んでいる遺構である。杭はほぼ当間隔に打ち込まれているが、円形に一層するものはない。杭は直径4~7cm前後・長さ50~60cmを測るもので、いずれも広葉樹の自然木と割木の両者から成る。これらの遺構からの出土遺物はなく、S X 43の南辺の杭の外側に立てかけられた広鉢未製品を1点確認ただけである。また、S X 43の南東約40cmでは広鉢未製品（三連）を確認している。

これらの円形杭列遺構は、各地での数少ない検出例と同様、木製品製作に関わる遺構と考えられ、厚さ1.2mを測る2度目の洪水と考えられる暗灰色シルト質細砂層を中心とする埋没土（河道上層）に覆われている。



fig.16-8.
弥生時代前期
後半の土器

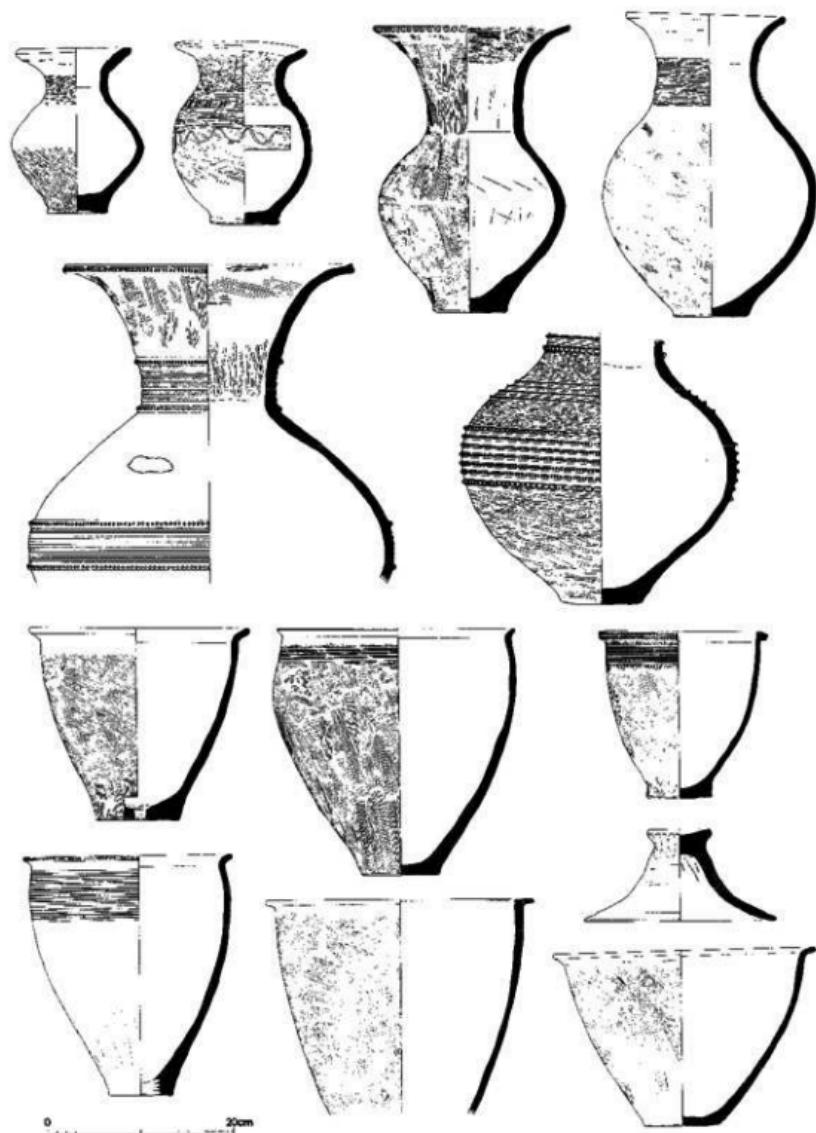


fig.16-9. 莊生時代前期後半の土器実測図

第2遺構面

現地表下約80cmで確認した遺構面で、褐色砂質土からなる遺物包含層に覆われている。

堅穴住居1棟（SB01）、土坑30基、落ち込み39基、ピット184ヶ所などの多くの遺構があり、一部に切り合が認められる。

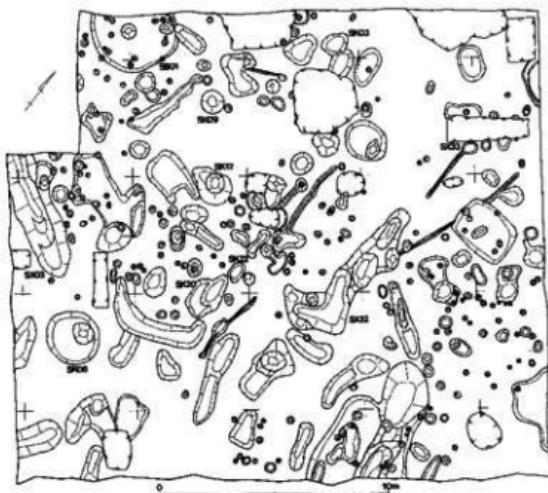


fig.16-10.
弥生時代中期
の遺構平面図

SB01

SB01はA・B-0・1区で検出した直徑3.75mを測る円形の堅穴住居である。壁高は16cmを測り、周壁溝は存在しない。床面には中央土坑と考えられる炭のつまつた土坑（直徑60cm、深さ15cm）1基とピット14ヶ所がある。ピットは直徑20~25cmのもので、柱痕の確認できたものはない。出土土器は少なく、ピットNo.14から壺の体部を検出している程度である。

SX03

SX03はA-2・3区で検出した溝状遺構で、最大幅1.7m・長さ5.7m以上・深さ65cmを測る。南端に近い東斜面では押しつぶされているものの、壺の完形品を検出している。土器内の埋土からの出土遺物は特にならないが、土器棺の可能性も考えられる。また、底面から10~15cm浮いた状態で、人頭大の偏平な花崗岩砾を中央付近と南端で1点ずつ確認している。

SK03

SK03はC-0区で検出した楕円形の土坑で、直徑80~115cm・深さ10cmを測る。壺が押しつぶされた状態で1点出土している。

SK09

SK09はB-1区で検出した円形の土坑で、直徑98cm・深さ25cmを測る。壺の底体部1点と壺の底部が若干出土している。

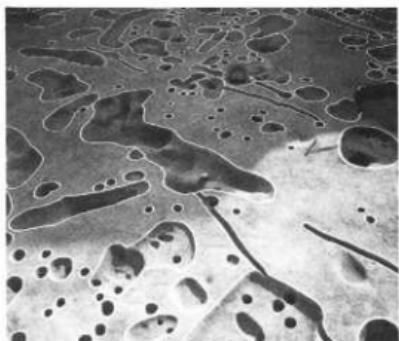


fig.16-11. 弥生時代中期の遺構



fig.16-12. S X 03内壺形土器

出土遺物

出土遺物には、多量の弥生土器のほかに、磨製石庖丁10点・磨製石斧1点・サスカイト製刃器（石庖丁？）1点・サスカイト製石鎌10点・軽石製浮子1点などがあり、サスカイトの円錐・フレイク・チップも多量に出土している。このうち、弥生土器については、畿内第Ⅲ様式を主体として、第Ⅱ様式から第Ⅳ様式を含む中期諸段階のものである。

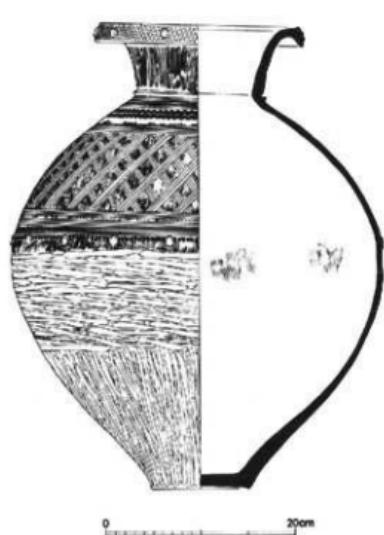


fig.16-13. S X 03出土の弥生土器実測図

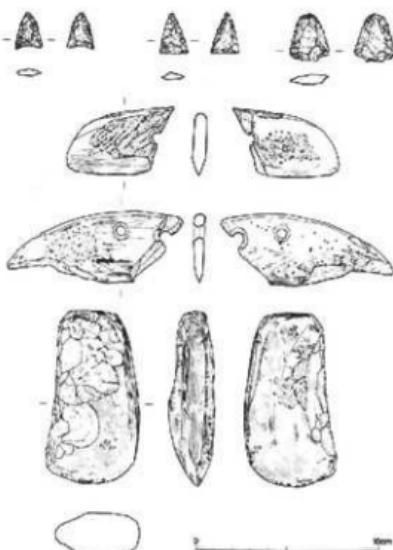


fig.16-14. 弥生時代中期の石器

第1 遺構面

現地表下約60cmで確認した遺構面で、土坑4基・ピット26ヶ所・不定形の落ち込み2基などを検出している。遺構の頻度は当遺跡において最も低い。

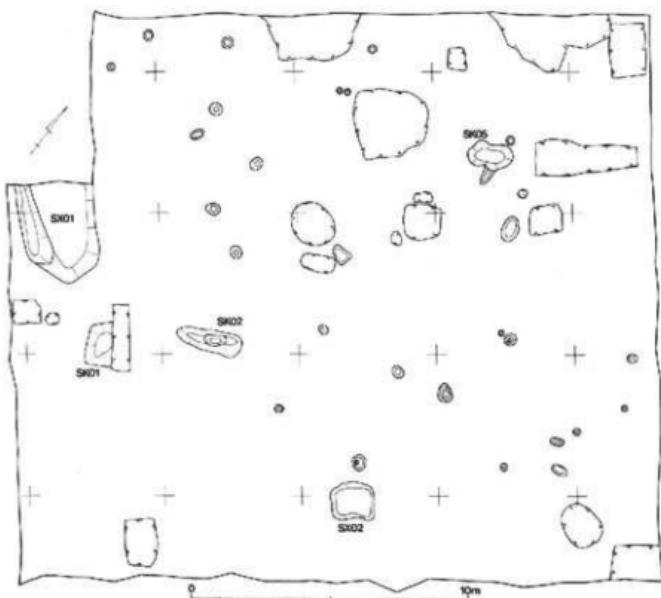


fig.16-15.
庄内期の
遺構平面図

SK01

S K 01は東半を攪乱によって失うものの、一辺1.6m・深さ20cmを測る隅丸方形の土坑である。高坏の坏部1点と甕2点が出土している。

SK02

S K 02はB-3区で検出した土坑で、長さ2.4m・幅85cm・深さ42cmを測る。小型の直口壺が1点出土している。

ピットは直径20~70cm程度のさまざまな規模のもので、建物を構成するには至らない。



fig.16-16. 庄内期の遺構



fig.16-17. S K01遺物出土状況



fig.16-18. S K02

2.まとめ。

今回の調査でわかったことをまとめると次のようになる。

- ① 当遺跡は板宿周辺ではこれまで全く存在の知られなかった遺跡であり、今回の調査地点だけでなく、かなり広い範囲にわたって存在する可能性が考えられる。
- ② 弥生時代前期後半以前の水田址は、近畿地方でも最古段階に位置づけられる貴重な発見である。稲作技術が日本に伝わってまもなくの水田址であり、当時の水稻耕作を考えていくうえで重要な資料と言える。
- ③ 弥生時代前期後半の河道下層で検出した円形杭列造構については、その性格が判然としないものの、全国的に見てそれほど検出例は多くない。また、膨大な量の完形に近い土器群は、一括資料としては良好な資料と言える。そして、広鉗は未製品を含めて、農耕具の製作過程を知るうえで興味深い資料である。
- ④ 弥生時代中期は、造構の数や遺物の量からみて、当遺跡の最盛期であったと考えられる。
- ⑤ 庄内期では、造構密度が低いものの、土坑一括の土器は、近年神戸市域でも類例が増加してきている当該期の資料を補強できるものと思われる。

III. 第2次調査

1. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴い実施したものであり、第1次調査地点の南東約30mに位置する。

調査地は工事中に発見されたこともあり、また北側、南側、東側の三方を民家で囲まれているため、擁壁工事完了後に調査を実施した。

重機により盛土を除去したのち、人力による掘削をおこなった。検出された遺構は時期不明の掘立柱建物、弥生時代中期から後期に至る土坑、柱穴、溝等である。

第1遺構面

S B01

掘立柱建物1（S B01）に伴うと考えられる柱穴が、4ヶ所確認された。調査面積が狭く、遺構に伴う遺物が確認されなかつたため、建物の規模や性格については不明である。第一次調査地点において、同一の層より弥生時代後期から古墳時代前半にかけての遺物が確認されていることから、当該時期の遺構である可能性が高い。

S X01

調査区南半部分において、第1遺構面の基盤層から、遺物の集積（S X01）が検出された。出土した遺物は、弥生土器・石包丁・砥石・磨製石斧・石鎌・石錐・サヌカイト剝片等である。土器は細片が多く、断面が磨耗していることから、遺構に伴うものではなく二次的に堆積したと考えられる。弥生時代中期前半から、後期に至るものまで混在しているが、第Ⅲ様式の遺物を主体としており、第Ⅳ様式の土器は極めて少ない。

第2遺構面

ピット106ヶ所（S P005～110）・用途不明土坑2基（S X02・03）・溝状遺構1条（S D01）が検出された。

S P05～110

S P005～110は、大部分が柱穴である。埋土より出土した遺物は、弥生土器・サヌカイト剝片等であり、時期は、第Ⅱ様式から第Ⅲ様式に至る頃と考えられる。土坑の密集度が高く、建物の規模、性格等は不明である。

S X02

S X02は直径約80cm・深さ15cmを測る不整円形の土坑であり。埋土より第1様式の土器が出土した。

S X03

S X03は直径約40cm・深さ25cmを測る不整形の土坑である。埋土より壺型土器1個体分が細片となって出土した。

S D01

S D01は幅180cm以上・深さ約20cmを測り、土坑群を切り込んだ状況で検出された。調査区外へ続くと考えられ、全体の規模、形状は不明である。埋土より第Ⅲ様式の土器片・サヌカイト剝片等が出土した。

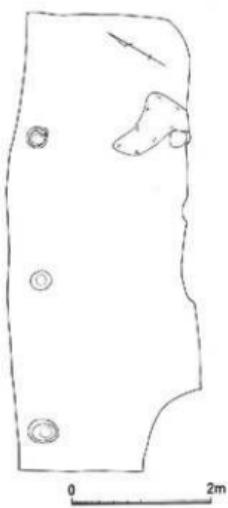


fig.16-19. 第1遺構面平面図



fig.16-20. 第1遺構面全景

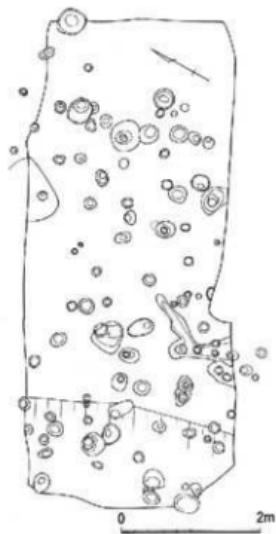


fig.16-21. 第2遺構面平面図



fig.16-22. 第2遺構面全景

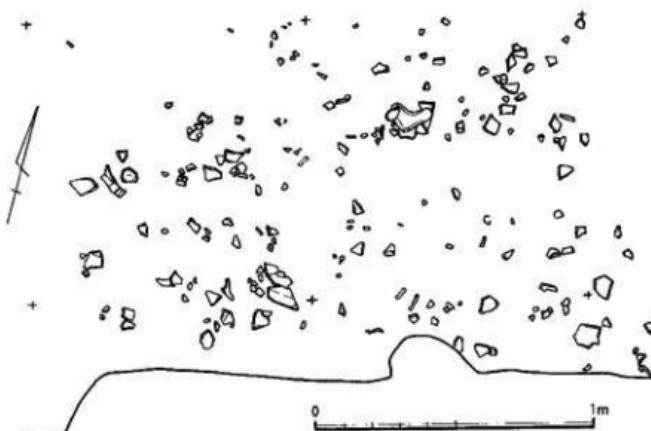


fig.16-23.
S X 01平面図

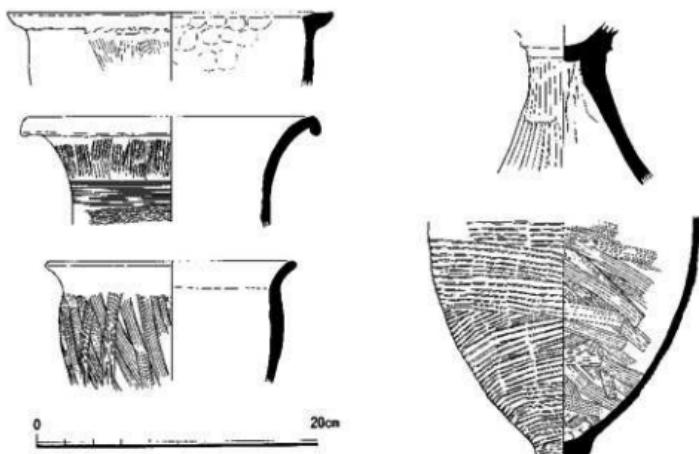


fig.16-24. 遺物実測図

2. まとめ

今回の調査では、弥生時代中期から後期にいたる遺構が検出された。しかし、各時期の遺構が同一面で多数検出されたため、遺物が出土しなかった遺構の時期は確定しがたく、同一時期の遺構の分布状況の把握が困難である。しかし、柱穴を主体とする遺構の密集度の高さは、当遺跡の集落が第1次調査地点で検出された河道の東側にも広がることを示している。

ながたじんじやけいだい
17. 長田神社境内遺跡

1. はじめに

当遺跡は、大正13年に長田神社が焼失し、その後再建のために地均しを行った際発見された遺跡で、弥生土器・石器・瓦等が出土した。今回神社南側で再開発事業の計画が興り、遺跡の有無を確認するため、昭和60年10月及び昭和62年2月に試掘を実施した。その結果、遺跡は長田区長田町1丁目まで拡がっていることがわかった。

調査は昭和62年2月から継続して行っており、今年度は長田町2丁目部分（北地区）の東半分と1丁目部分（南地区・S A～S C区）について調査した。

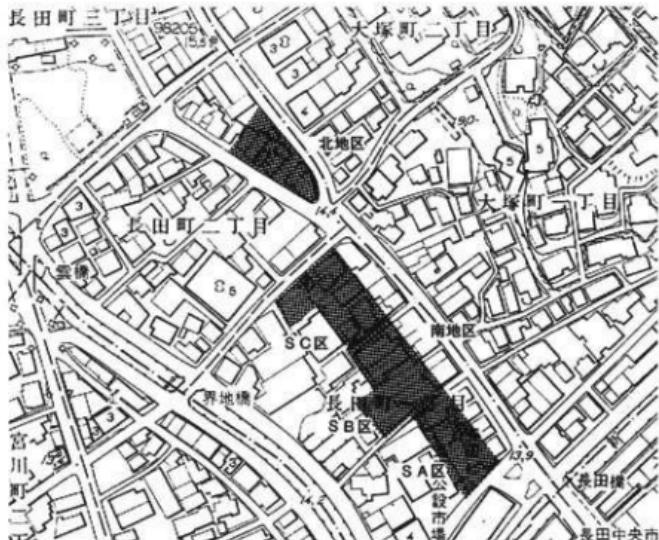


fig.17-1.
調査位置図

2. 調査の概要

北地区

当地区の東半からは、縄文時代晚期の土坑1、弥生時代末～古墳時代初頭の掘立柱建築1棟・溝1条等が検出された。この他、縄文時代晚期後半（滋賀里IV式、船橋式、長原式）の土器片が出土している。

土坑1

4 m × 3 m の不整辺円形の土坑で、深さ0.4～0.8mを測る。縄文時代晚期後半（滋賀里IV式）の土器片と焼土塊、灰等が検出された。

掘立柱建物1

1間×2間（2.1m×2.7m）の小規模なものである。

溝1

調査地東端近くから検出された溝で、埋土中から銅鏡が出土した。



fig.17-2. 北地区平面図

S A 地区 当地区では、弥生時代後半の堅穴住居 2 棟・壺棺墓 1 基・溝 1 条・土坑・ピット、平安時代終わり頃の木棺墓 1 基が検出された。

S B02 西半部は地域外となっており全体を知り得ないが、東半部から推定すると、直径約 9 m に達する住居址である。床面の壁添いに幅約 1 m・高さ約 15 cm のベッド状遺構が設けられていた。平面形は六角形である。

S B03 東西約 5 m・南北約 4 m の隅円長方形の住居址である。床面の残存状態が悪く明確ではないが、これも床面の四周にベッドを持っていた可能性がある。床面上の遺物は少なく、高坏が出土したのみだが、住居址が埋まる直前に胸部に穿孔を持つ完形の壺を含む土器片が多数投棄されていた。

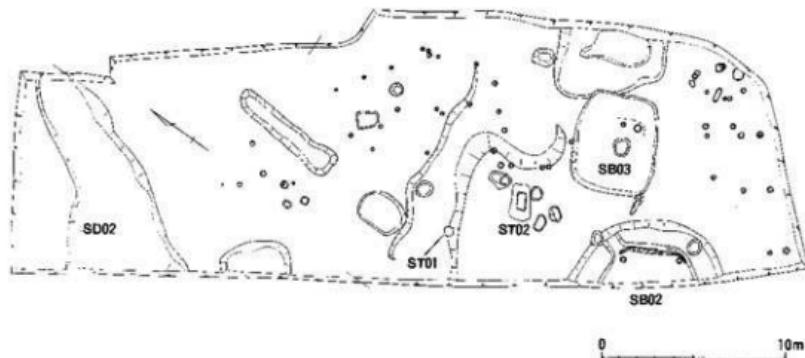


fig.17-3. S A 地区平面図

S T 0 1 長さ50cm・幅45cm・深さ25cmの梢円形土坑内に、口縁部と底部を打ち欠いた二重口縁壺を棺に転用して収めたもので、裾部を欠いた高壺で蓋となっていた。

S D 0 2 S A区北端部で検出された溝で、幅約5m・深さ0.5~0.8mである。溝底から完形品を含む多量の土器が出土した。

S T 0 2 長さ2m・幅0.9m~1.1m・深さ0.15mの長方形墓坑内に箱形木棺を收める。木棺は長さ1m・幅0.4mである。棺底は東が約10cm低く、頭位は西と思われる。

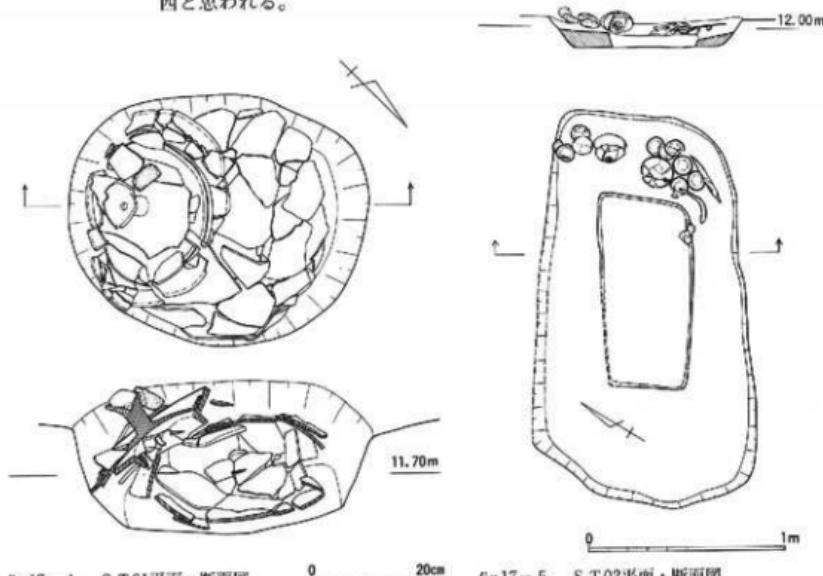


fig.17-4. S T 01平面・断面図

0 20cm

fig.17-5. S T 02平面・断面図

0 1m



fig.17-6. S T 01



fig.17-7. S T 02遺物出土状況

- S B 地区** 当地区からは、弥生時代後期の自然流路・土器群、鎌倉時代の柱穴群・井戸等が検出された。
- 自然流路** 流路は苅藻川の旧河道と考えられ、埋土中より縄文土器・弥生土器・土鍤・サヌカイト剝片・同刀器・石鐵等が出土している。
- 縄文土器は、大半が晩期後半（滋賀里IV式、船橋式、長原式）のものであるが、後期ないしそれ以前に溯ると考えられるものが含まれている。
- 土器群** S B 地区の南 3 分の 1 で検出された。旧河道がほぼ埋没した段階で、いくつかの小群を成して投棄されていた。弥生時代後期前半のものであると考えられる。この土器群が形成された後、S B 区の南半は、水がゆるやかに流れ込むような地形になっていたと思われ、シルト層が堆積していた。土器の投棄は、シルト層形成時にもひき続行され、この層内からも多量の土器が出土した。時期は後期後半と考えられる。
- S E01** 長径 1 m・短径 0.9 m・深さ 0.3 m の楕円形の素掘りのもので、底部のやや南寄り部分を径 0.5 m・深さ 0.5 m の円筒状にさらに深く掘り込み、井戸側、水溜共に 2 個の曲物を入れ子にして使用していた。井戸側、水溜共に 2 個の曲物を入れ子にして使用していた。廃棄の時期は、遺物が少なく明確ではないが、S C 地区で検出された同構造の井戸の時期を考慮して、13~14 世紀のものと考えておきたい。
- 柱穴・土坑** S B 区南半で検出した柱穴群及び中央部の土坑（SK02）の時期は、遺物が少量で確定できないが、井戸と同時期と考えられる。SK02からは、大觀通宝（初鉄 1107 年）が出土している。

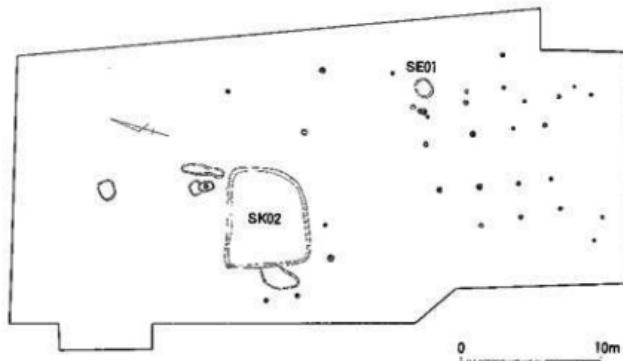


fig.17-8 S B 地区平面図

- S C 地区** 当地区からは、鎌倉時代の井戸と不整形土坑及び中世から近世の石組井戸等が検出された。
- S E 03** 長径約1.8m・短径1.3mの楕円形の掘形に、一辺0.7mの方形の木組井戸側と、径45cmの水溜用曲物を使用していた。瓦器焼や土師器小皿、須恵器焼などが出土している。
- S E 04** 束半は、調査区外のため不明であるが、南北約2.6m・東西約2.6m以上の隅円方形の掘形であったと考えられる。後世の破壊が著しく、井戸側材が廃棄された状況で出土している。また、径45cmの水溜用曲物が据えられていた。瓦器焼・土師器小皿・須恵器焼等の他、現存長約25cmの呪符木簡が検出された。
- S E 05** 長径約1m・短径約80cmの不整形の掘形内に水溜用の曲物が残存していた。曲物の直径は約50cmで、2個が入れ子になっていた。須恵器焼や甕などが少量出土している。

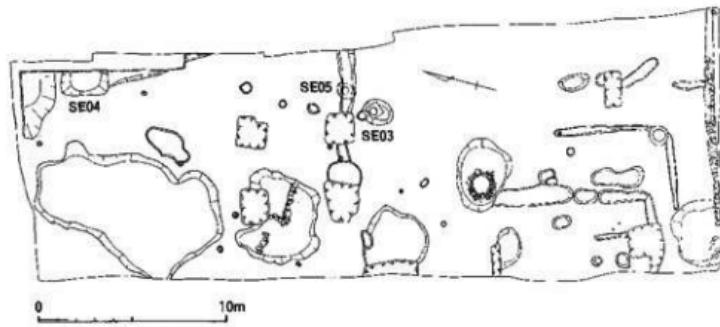


fig.17-9. S C 地区平面図

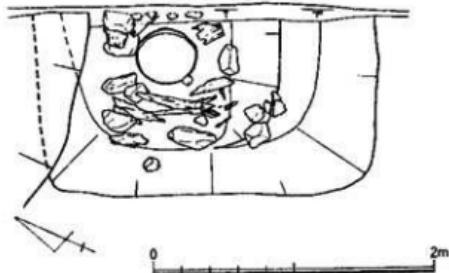


fig.17-10. S E 04 平面図

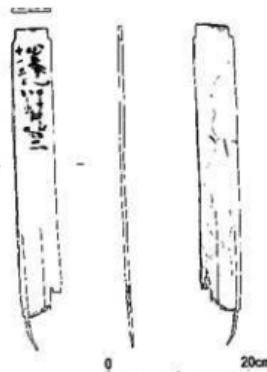


fig.17-11. 呪符木簡実測図

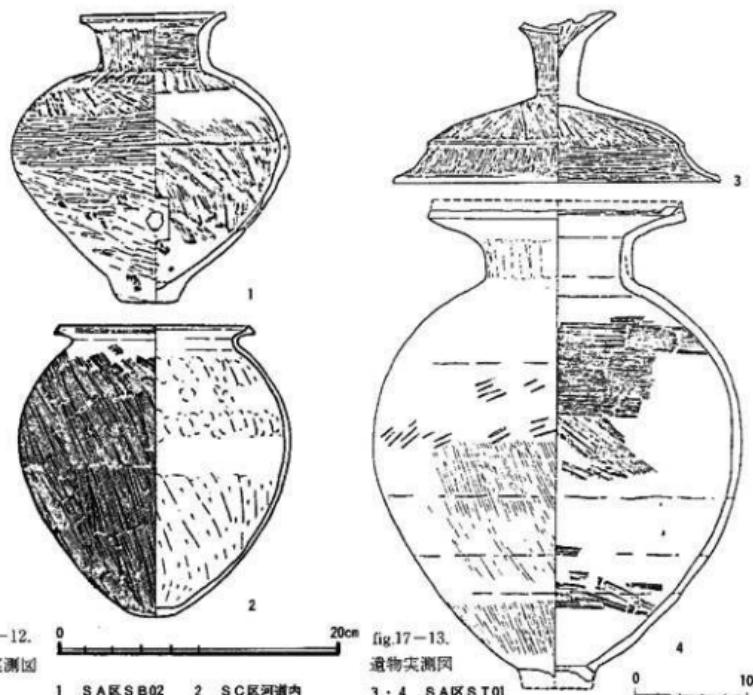


fig.17-12. 遺物実測図
1 SA区SB02 2 SC区河道内

fig.17-13. 遺物実測図
3・4 SA区ST01

3.まとめ

今回の調査では縄文時代晩期後半の土器が比較的まとまって出土した。遺構も滋賀里IV式に属する土坑が検出され、周辺に集落址の存在が想定しうるようになった。

また、縄文時代では西方の影響を受けた土器、河内地方から搬入された土器や弥生時代～古墳時代では河内系、山陰系、四国系の土器などがあり、当時、それらの地方と何らかの交流があったことが明らかとなった。

弥生時代後期前半には、S B・S C地区は共に荘屋川の山河道に当たっており、自然遺物も数多く出土した。古墳時代初頭頃にはほぼ完全に埋まっていたものと考えられる。さらに、S A地区で検出した堅穴住居により、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の集落の一端が明らかになった。住居址には六角形を呈した大型のものがあり、当時の集落の内で特殊な性格を持った建物と考えられる。

その他、平安時代終わり頃の木棺墓には、各種の品が供えられており、当時の葬送儀礼の一端が明らかにできた。

18. 生田遺跡

1. はじめに

当遺跡は、昭和62年度に試掘調査によって確認された新発見の遺跡である。ただ、周辺には古墳が分布していることから、付近には集落の存在が予想されていた。

2. 調査の概要

当該地は、数年前まで学校用地であったため、校舎が建築されていた部分は、その基礎と解体時の掘削により遺構面の大半が失われていた。

遺構面は、北西で標高14m、南東で11.5mとかなりの傾斜がある。遺構は、古墳時代のもので、大きく二時期に分けられる。その内の古い時期の遺構は、須恵器出現直後で5世紀中頃である。また、新しい時期の遺構は、やや時を経て、6世紀初頭である。

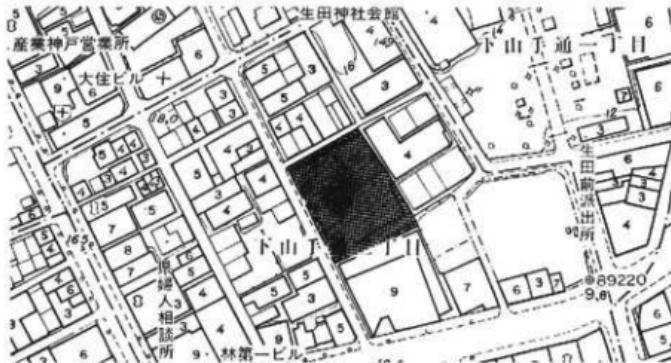


fig.18-1.
調査地位置図



fig.18-2.
調査地全景

古墳時代中期

この時期の遺構は、竪穴住居 1 棟（S B01）と南西隅で検出した落ち込み 1ヶ所である。

S B01は、一辺6.4m×6.8mのほぼ方形の竪穴住居で、4本柱である。この柱穴は、深さ15~30cmと浅い。北辺にカマドが検出された。煙道になるような壁面の突出は存在せず、どのような構造であったか不明である。

カマド周辺には甕・瓶・高坏等の土器器が多く残されていた。またカマドからかき出された炭・灰が周辺に多量に残され、その中から当時食料にした動物の骨片や植物種子、製塩土器が出土している。製塩土器は全て細片であり、このカマドで焼き塩が行われ、散状塩がつくられたと考えられる。なお、カマドからかき出された炭・灰層中に滑石製の白玉 4点が含まれていた。

住居中央には浅い窪みが存在し、そこには底部を上にした状態で甕が残されていた。一般的には中央土坑か炉と考えられる位置であるが、埋土中に炭・灰層は認められなかった。

南西隅で検出した落ち込みは、埋土の大部分が炭・灰・焼土塊で、それらには S B01と同様に動物の骨片や製塩土器の細片が含まれており、住居跡であった可能性が高い。また、滑石製の白玉 2点も含まれていた。

以上の遺構から出土した遺物の時期については、須恵器は一片も含まれていないが、須恵器出現直後の 5世紀中頃に位置づけられる。

fig.18-3.
S B01



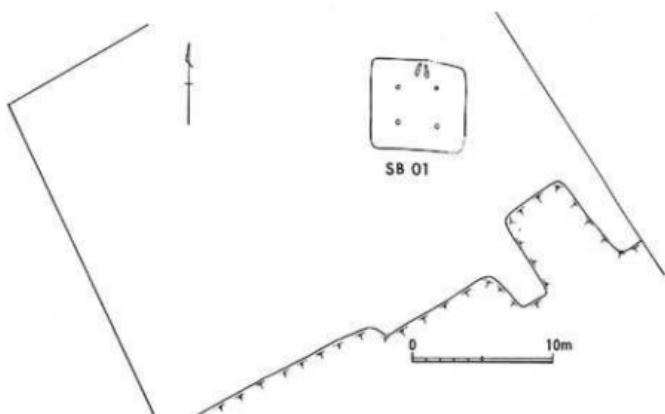


fig.18-4.
5世紀中頃の遺構



fig.18-5.
S B01北半部



fig.18-6.
S B01カマド

古墳時代後期

須恵器出現後の遺構として、竪穴住居1棟(SB02)、掘立柱建物6棟(SB03~08)、溝状遺構5条(SD01~05)などが存在する。

SB03~08は、同一地区に重複して検出された掘立柱建物で、柱列の方位によって2時期に分けられる。しかし、この2時期の前後関係を直ちに断定することは困難である。今後、柱穴内の出土遺物を詳細に検討することによって、判明する可能性はある。

SB03~05は、全て2間×3間の総柱であるが、SB03のみ棟を南北方向にとる。建物規模はそれぞれ異なり、SB03は5.0×5.5m、SB04は3.5×5.0m、SB05は4.5×5.0mである。

柱掘形はいずれも大型で、一辺0.4~0.7mの方形ないしは長方形で、深さは0.2~0.7mである。また、柱穴も径0.3mと大型である。

SB06~08は、全て2間×2間の総柱であるが、規模はそれぞれ異なり、SB06は3.0×3.5m、SB07は4.0×4.5m、SB08は3.5×3.5mである。これらの掘立柱建物は、先のSB03~08の柱穴及び掘形と大差ない。

現在、掘立柱建物として確認できているのは以上の6棟であるが、柱穴は数多く検出しておらず、今後の資料整理の過程で新たな建物を確認できる可能性は充分にある。また、建物群の分布については、北へはのびず南にのびていたようである。

柱掘形内からの遺物の出土は極めて少なく、また小片であることから時期の確定は困難であるが、およそ6世紀初頭ないしは前葉と考えて大過ないであろう。特異な遺物として、滑石製の紡錘車・有孔円板・白玉があげられる。これらは、SB04の柱掘形から出土したもので、建築時における祭祀の存在を窺わせる資料である。(今後の資料整理の過程で、柱穴の位置が若干変更される可能性がある。)



fig.18-7.
掘立柱建物群

S B02は、S B03～08に後出する時期の竪穴住居である。後述する溝状遺構や近代の擾乱によって、半ば以上を失っているが、一辺5.5m程度であったと推定される。比較的残りの良い北辺には、カマドが設けられている。カマド内及びその周辺には、炭・灰層が残されていた。この中にはS B01同様に、食料にしたであろうと考えられる動物の骨片が含まれていた。また、滑石製白玉2点も含まれていた。

なお、当住居跡のカマドは、焚口部が0.8mと通常のものよりかなり広く二口であった可能性がある。しかし、カマド内部に隔壁などの施設は認められず、確定はできない。

溝状遺構は5条確認したが、いずれもほぼ平行している。

S D03は、幅1.8m・深さ0.3～0.5mで、南辺は一段深くなっている。埋土は、下層はシルトで、上層では粗砂である。断面形から推定すると、人為的に掘削された溝と考えられ、最終的には洪水によって埋没したと考えられる。粗砂層中には、多くの土器が包含されており、鉄斧も出土した。南東隅にわずかに残された遺構面上で、S X06とした遺構も形態的には類似しており、あるいは屈曲してつながっていたのかもしれない。

S D04・05は、S D03の南側に沿うように存在する。いずれも幅0.3～0.6mで、最も深い部分では0.6m程度である。埋土は、S D03と同様である。いずれの溝からも土錘が出土している。これもまた人為的な遺構と考えられるが、断定はできない。

以上の溝状遺構から出土する遺物は、5世紀末から6世紀後半までと幅広く、開始時期の確定はできないが、埋没したのは6世紀後半と推定される。



fig.18-8. 鉄斧出土状況



fig.18-9. 東南部分全貌

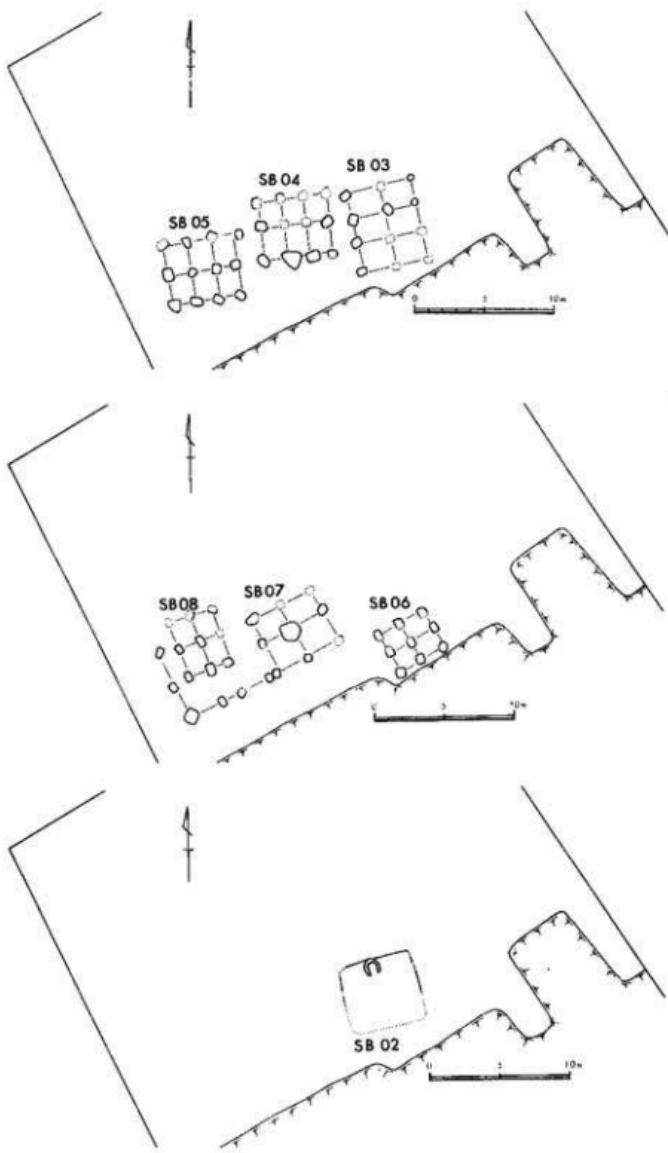


fig.18-10. 6世紀の造構



fig.18-11.
6世紀前半の
遺構

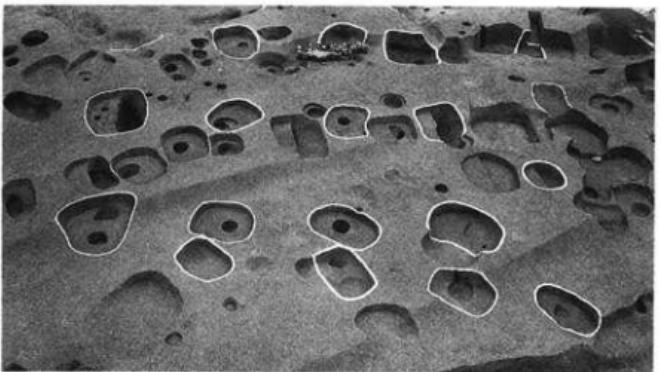


fig.18-12.
6世紀前半の遺構



fig.18-13.
S B 02

近代

調査区内に2ヵ所の井戸が存在した。1基は完全に埋められていたが、残る1基は盛土除去中に開口したものである。径1.13mの円形で、瓦積みであることが確認できた。恐らく明治時代頃の構築と考えられたが、底面で確認するため、埋土の除去を進めた。開口部より2.3mで瓦積みは終わりそれ以下は、板材による円形の枠であった。開口部より4.0m付近まではごみのようなもので埋められていたが、それ以下は白色の粗砂層であった。6.0mまで掘り進んだが、結局底面に到達できずに中止した。白色の粗砂層中から陶器片3片を検出したが、時期については不明である。



fig.18-14.
近代井戸

3.まとめ

今回の調査で最も注目されるのは、掘立柱建物群と各遺構出土の滑石製品である。

掘立柱建物群は、その規則性や柱穴規模などから、当地方の有力豪族の倉庫群と考えられる。そこで思い浮かべられるのが、日本書紀の神功皇后条に見える「活田長狭國」である。具体的な根拠を掲げずに、にわかにこの記事と結びつけることは危険であるが、付近に存在する地名「長狭」を考え合わせると、その可能性は充分あると言えよう。

滑石製品は、白玉が最も多くその大部分は、S B01・02のカマド中の炭・灰層中からと、調査区南西隅の住居跡と考えられる遺構内の炭・灰層中からの出土である。カマドにおける祭祀事例については明らかではないが、偶然の出土とは考えられず、その意味については今後の課題である。

また、柱穴と考えられる遺構から、滑石製の紡錘車・有孔円板・白玉が一括で出土したことは、地鎮祭祀と関連すると考えられるが、これもまた今後の課題である。

19. 雲井遺跡

1. はじめに

雲井遺跡は六甲山麓から南に流れる生田川によって形成された複合扇状地の末端に近い緩傾斜地（現地表標高12.5～13.5m）に存在する遺跡である。当遺跡周辺は、市街化が早くから進んでいたために、遺跡の存在は不明であった。雲井通6丁目地区市街地再開発組合より、再開発ビル建設の計画があり、開発事前協議が当教育委員会に提出されたため、試掘調査を実施した。試掘調査の結果、地表下60～80cmに弥生土器を含む遺物包含層が検出され、敷地の全域に遺跡が広がることが確認された。

この成果をもとに、昭和62年6月2日からビル建設により破壊すると考えられる範囲を対象として調査を開始した。

2. 調査の概要

調査は近代の盛土および從来の建物の基礎などを重機よって取り除いた後に、人力により包含層の検出・遺構の検出および精査を実施した。

層位

基本的な層序は、現地表から約70cmが近代の盛土層で、その下に旧耕土（～明治時代）、灰褐色細砂層（弥生時代中期包含層）、暗灰色粘質細砂層（縄文時代晚期～弥生時代前期包含層）、黄灰色粗砂層、暗黃灰色粗砂層（縄文時代前期包含層）、黄褐色砂礫層となる。



fig.19-1. 調査地位位置図

縄文時代前期

縄文時代前期の遺構としては4基の炉址、集石遺構等を検出した。

炉址一覧

地 区	プラン(cm)	形 状	備 考
炉址1 C-4	140×90×70	椭円形	炭化木材遺存
炉址2 D-5	80×60×20	不整形	炭化木材遺存
炉址3 D-2	60×50	円 形	小粒の炭化物
炉址4 B-2	50×10	円 形	焼土検出

集石遺構

A-2区で検出したもので、長さ2.8×幅1.5cmの範囲に人頭大～拳大の花崗岩の河原石を用いて積み上げたように築いていた。集石に使われた石には火熱のための変色や炭化物の付着は認められなかった。また、縄文土器(北白川下層Ⅲ式)の底部が1点、集石の埋土内から出土している。

このほか、炭化物の密集するヵ所や焼土塊等の散布を検出しており、他にも存在したものと推定される。

前期の遺物は調査区のほぼ全域に分布しているが、分布密度に顕著な差があり、C-2区ではサヌカイトのフレイク・チップが集中して発見された。土器の分布はC-3・C-2・D-3区などに集中していた。

出土遺物

暗黄灰色粗砂層からの出土遺物は縄文土器と、それに伴うと考えられる石器類である。

縄紋土器

縄紋土器の内、最も出土量の多いのは「3」の字形の2連1対の特殊な施文具を用いて施された爪形紋をもつ羽鳥下層Ⅲ式土器である。また、表裏を条痕により調整を行い、口縁部を折り曲げて突帯状にするものがある。この土器は山陰地方を中心に分布する早期末から前期初頭のものと思われる。

A-2区からは、集石遺構で出土した北白川下層Ⅲ式土器の底部、C-3・4区からは船元Ⅰ式土器、F-4区では船元Ⅳ式土器、A・B-2・3区からは北白川C式土器が集中して出土した。

石器類

石器類では石鎌やスクレイパーの他、両端が尖り中央部の上下にノッチをもつ異形石器や磨製石斧・磨石等が出土している。

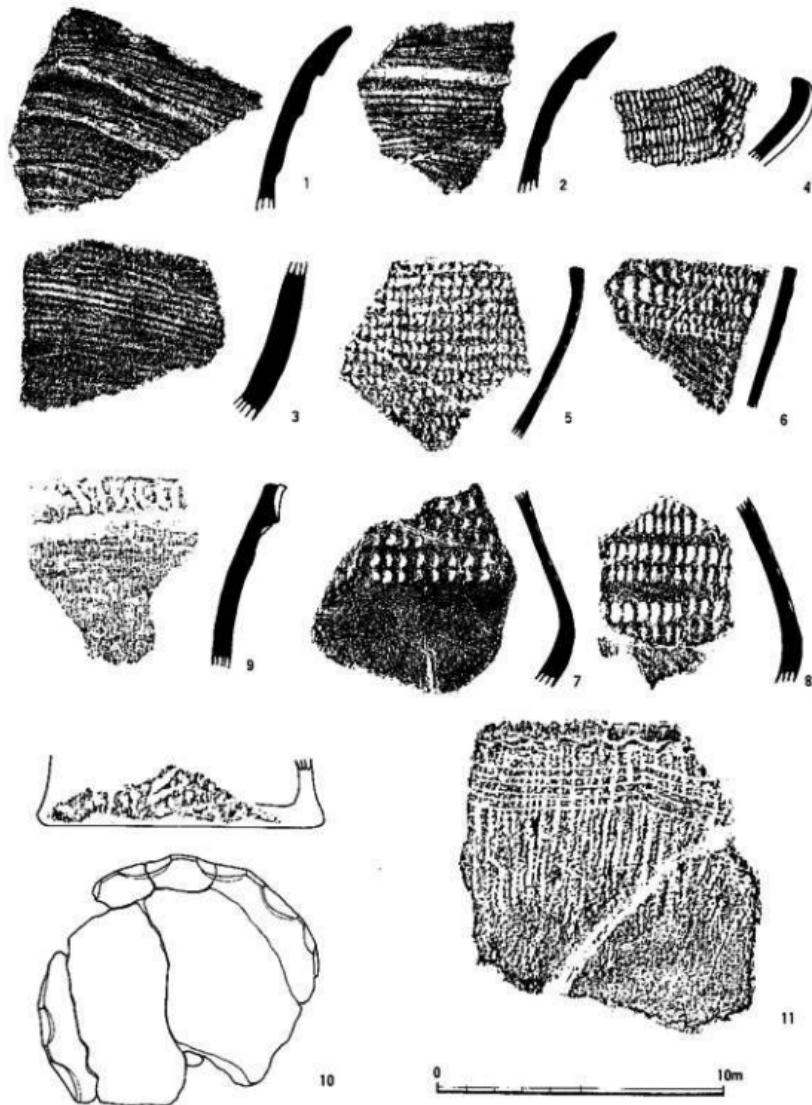


fig.19-2. 繩文前期・中期土器拓影

1~3 早期束腰条痕土器
4~8 羽鳥下層Ⅱ式
9 型式不明(前期末?)
10 北下川下層Ⅱ式
11 船元Ⅲ式

縄文時代晩期 この時期の遺構は調査区の西半に多く発見され、特にA-2～C-2・A-3～弥生時代前期～D-4区で集中し、落ち込み・土坑・柱穴等の遺構を検出した。

落ち込み1 多量の弥生土器と共に結晶片岩製石棒が出土した。用途不明の遺構である。

土坑 土坑は長さ1m・幅60cm内外の長方形のプランをもつものと、直径50～80cm内外の円形のプランをもつもの、溝状の形態をもつものにわかれ、総数約40基を数える。

柱穴 約300基が検出された。組み合わせ、建物の復元は困難である。

突帯文壺形土器 B-3区で突帯文壺形土器が出土している。この土器は水田開墾とその際に作られたと考えられる暗渠によって、口縁部と底部を失っている以外、ほぼ完形を保って出土している。出土状態から、浅く掘り窪めた後に土器を横位に置いたもので、土器棺として使用されたとも考えられる。

出土遺物 この時期の出土遺物は整理用コンテナで約20箱程度である。この内の大多数は包含層と落ち込み1からの出土遺物である。

落ち込み1から出土した土器は、弥生時代前期後半（井藤編年Ⅱ-a）の土器を主体とし、削り出し突帯および突帯文土器が十数片混在する。包含層から出土した突帯文土器は、長原式併行もしくはその以降のものと考えられ、滋賀里Ⅳ式・船橋式土器は少量である。突帯文土器の中には多量の生駒西麓産の土器が含まれている。

これと同時に発見された弥生土器の傾向は、ほぼ落ち込み1の出土土器の内容と近似しており、大多数は前期後半のものであるが、これに混じり木葉文をもつ前期前半の遺物の出土が、ごくわずかに確認されている。

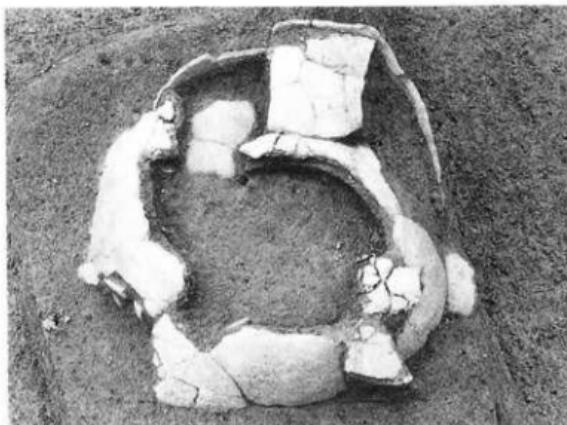
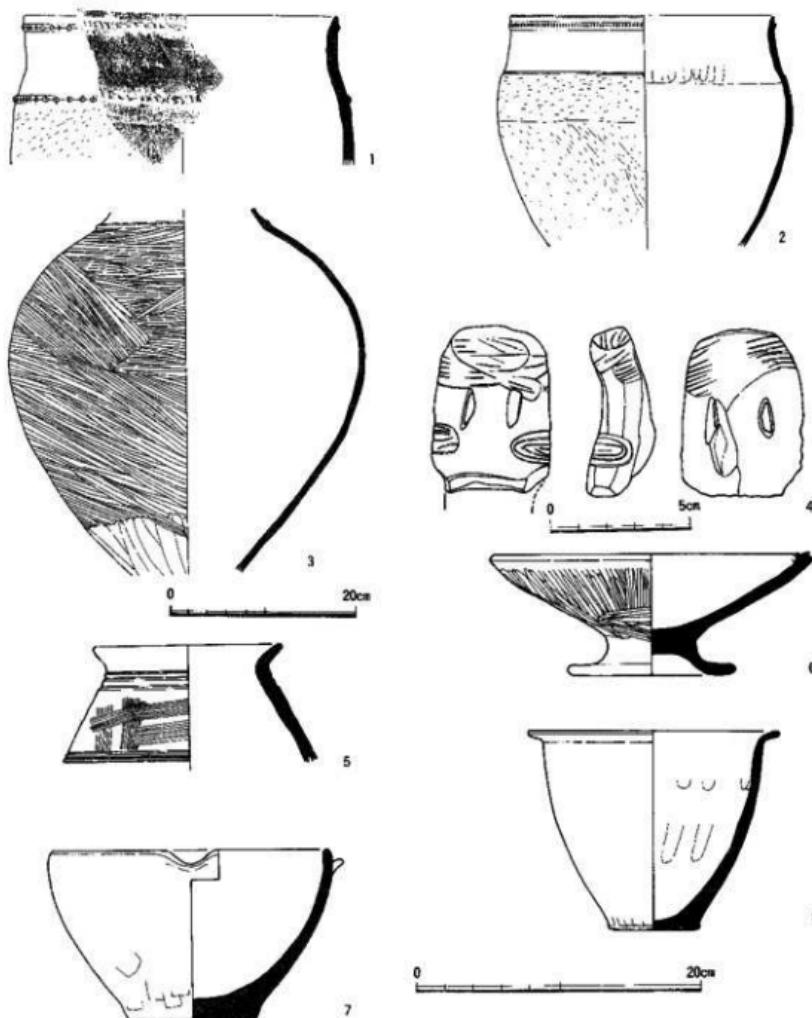


fig.19-3.
突帯文壺形土器出土状況



1~3 突唇文土器(縄文晚期)
4 土偶(縄文晚期)
6~8 弥生前期

fig.19-4. 縄文時代晚期～弥生時代前期造物実測図

弥生時代中期 弥生時代中期の遺構は、周溝墓・木棺墓・溝等の造構が数多く発見されている。

S D01 周溝墓1 南溝の東に連なるような形で検出された東西に長い溝で、東側では、流路によって削られている。現存長7.5m・幅1.5m・深さ0.8mを測るもので、溝底からは広口壺・長頸壺・斐形土器等が出土した。出土土器は底部や腹部に穿孔をされたものである。

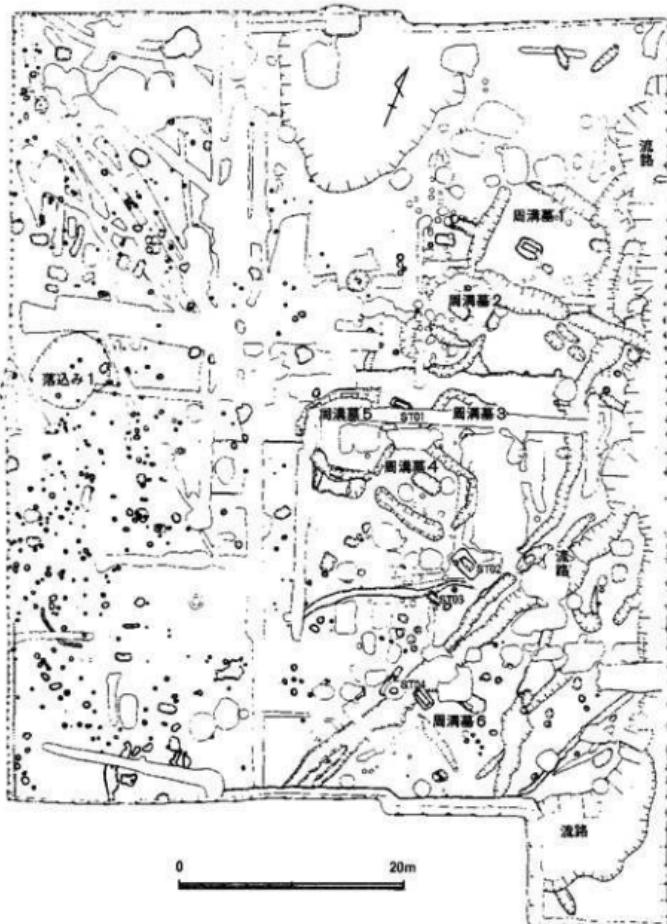


fig.19-5. 遺構平面図

S D02 S D01の南側に検出された東西に長い溝で、東側は流路によって削られている。現存長2.5m・幅0.9m・深さ0.3mを測るもので、溝の西端で広口壺が検出された。

その他の溝 この外にS D03～S D07の5条の溝状遺構を検出した。これらの溝は、周溝墓の溝の方向軸と一致する、東西あるいは南北方向に形成されている。また、溝内からは底部や腹部に穿孔をされた完形の土器等が出土し、周溝内の供献土器と近似した出土状態が取看される。

流路 調査区の東端部を流れた流路が検出されている。流路は中央付近から分岐し、西側に方向を変えて流れている。

また、流路の北半部では「く」の字上に屈曲し、周溝墓の溝を経よう流れていている。流路内の堆積層からは、縄文時代から平安時代までの遺物が出土している。



fig.19-6. 遺構検出状況

雲井遺跡周溝墓一覧

	プラン(m)	埋葬施設(m)	陸橋部	供獻土器出土位置	備考
周溝墓 1	10.5×11.0	木棺 160×55 2.2×1.7×40	2 南西 北東	南、北 西	溝内完形
周溝墓 2	6.0×9.5	1.9×1.4×0.3	3 東、西 南	北東 南西	底部穿孔
周溝墓 3	8.0×6.0	?×1.2×0.6 ?×0.35×?	1? 北西他	北	腹部穿孔他
周溝墓 4	8.5×6.0	2.7×1.3×0.6	2 南東 南西	西、南 南東 陸橋部	周溝 3 と南溝を共有
周溝墓 5	7.5	南溝底 0.6×0.4×0.35	東、西 西、南	東、西 南	周溝 3 と西壁を共有
周溝墓 6	9.0?×9.0?	木棺 1.0×0.55 北西隅 2.2×1.1×0.05	南西	台状部中央 東、南	木棺の痕跡良好

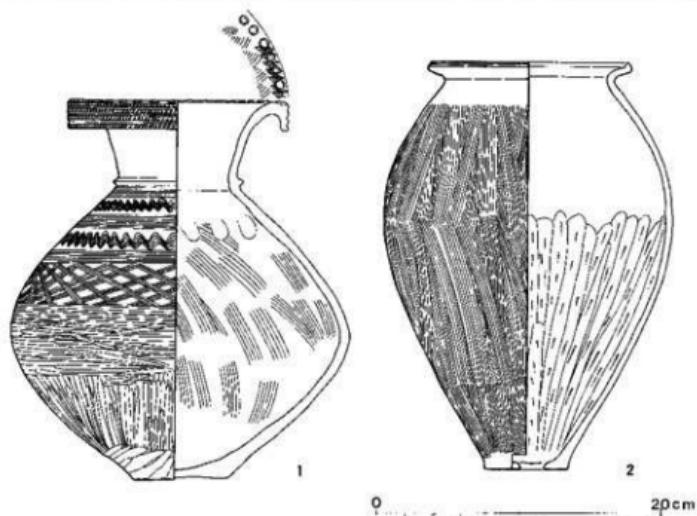


fig.19-7. 弥生土器実測図 1

1.2.周溝墓 1

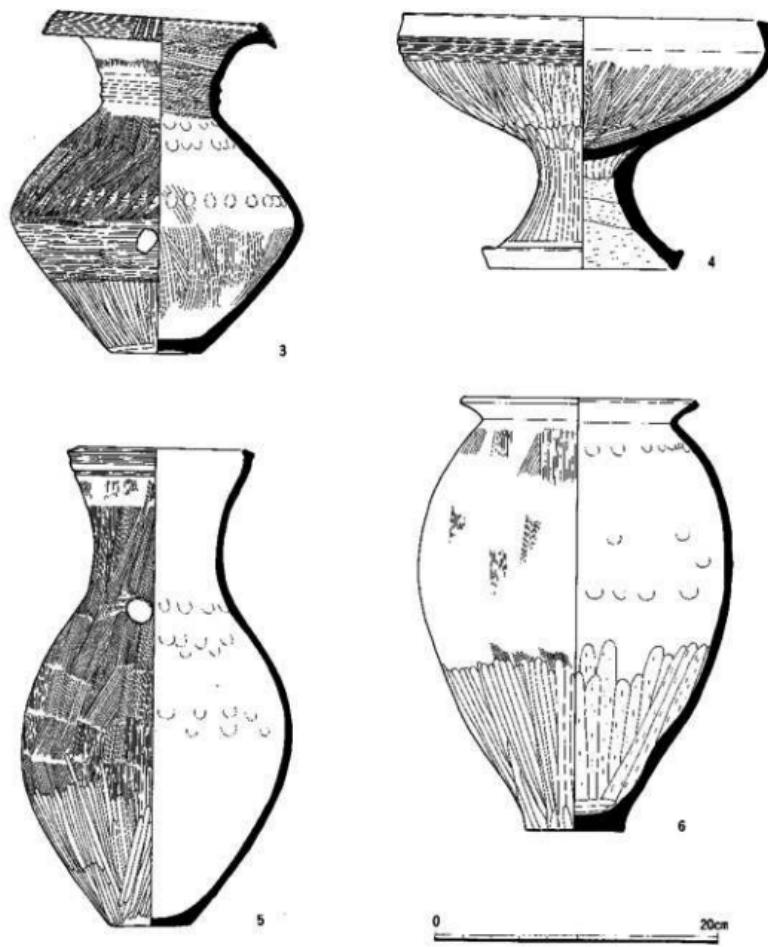


fig.19-8. 弥生土器実測図 2

3.周溝基5 5.周溝基1
4.周溝基6 6.周溝基3

3. まとめ

今回の調査では、縄文時代から弥生時代までの各種の遺構・遺物を発見した。

縄文時代の遺構・遺物の発見は、市内では稀な事である。特に前期前半の遺構・遺物は少なく、今回はその時間的・空間的な空白を埋めたばかりではなく、炉址の発見や遺物の分布を明確にした点でも、大きな成果といえる。出土した縄文時代の土器のうち、早期末期～前期初頭の山陰系の段状折り曲げ口縁部の表裏条痕整形の土器の出土は瀬戸内海地域では初めての例である。また、「3」字状の特殊な爪形文を持つ羽鳥下層II式土器が純粹な状況で出土したのも、福井県鳥浜貝塚について2遺跡目である。

次に縄文時代晩期から弥生時代前期のものであるが、当該期は採集経済から生産経済へ変化する、歴史的に重要な変革期にあたっている。

当遺跡で発見された遺構では、この両時期の土器が極めて複雑な状態で出土している。今後、整理を進めて行けば、この錯綜した状況をひも解く、鍵を握る資料といえる。

最後に弥生時代中期後半の周溝墓群である。東端部は後世に流れた流路によって削られているが、密接して築かれた周溝墓の発見は、当時の墓制や祭祀を知るうえで貴重な発見と言える。現状で明らかにできる周溝墓は6基であるが、方向軸を同じくする溝の存在や、北半部で屈曲する流路なども、周溝墓の一部と考えられることから、本来は十数基からなる周溝墓群が当該地に存在したと、推定される。

また、これらの墓址が検出されたことにより、周辺地にかなりの規模の集落址の存在が予想される。



fig.19-9.
調査地遠景

しのはら 20. 篠原遺跡

1. はじめに

篠原遺跡は、昭和の初め小林行雄氏によって紹介され、市内でも数少ない縄文時代の遺跡として周知されていた。近年になり、篠原A・Bの2地点で発掘調査が実施され、縄文時代中期～晚期および弥生時代後期の遺跡であることが明らかになり、縄文時代の住居址、土坑などの構造も発見され、しだいにその様相が明らかになりつつある。

今回の調査地は、個人住宅建設に伴い事前に試掘調査を行ったところ、弥生時代から中世にかけての遺物包含層が検出された。このため、建築影響範囲について、発掘調査を実施することになった。調査地は、北に広がる六甲山系裾部よりやや下った傾斜地に立地し、標高は73m前後を測る。昭和58年に調査された篠原A遺跡は、今回の調査地より約400m南東にある。また、昭和4年に小林行雄氏によって報告された遺物の採集地は、当調査地の東から南東に位置している。

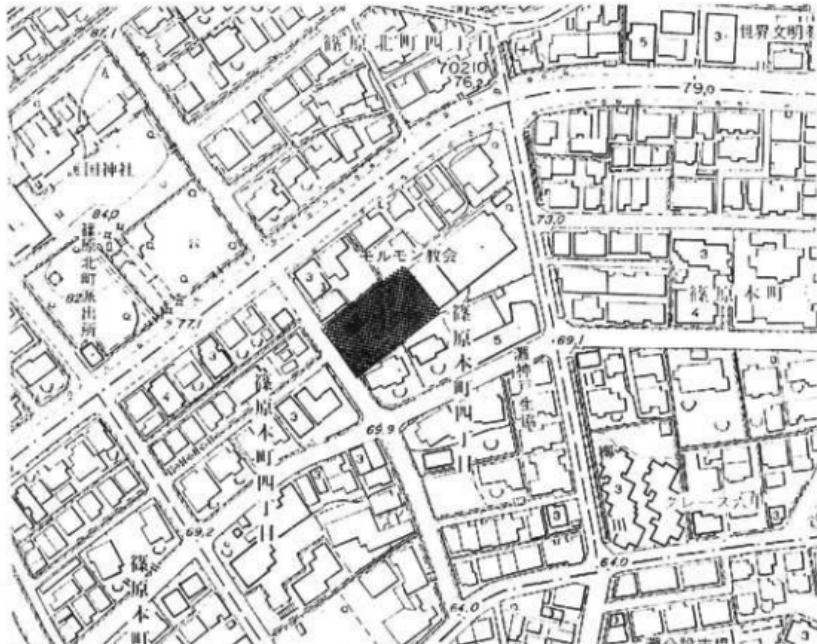


fig.20-1. 調査位置図

2. 調査の概要 今回の調査地は、おそらく昭和13年の水害時に堆積したと考えられる砂層およびその後の造成による擾乱層が厚く堆積しており、弥生時代後期の遺構面までは、現地表より約2~3mある。

層序 基本層序は下記のとおりであるが、調査地南半では近代の水田開墾時に削平を受けている部分もある。I・II層は、現代の造成時の擾乱盛土および水害時に堆積したと考えられる砂層で、III層は旧耕土である。なお、各層は、さらに数層に細分できる。

I層 表土（整地層）・II層 黄褐色粗砂・III層 暗灰色砂質土（旧耕土）・IV層 淡灰褐色砂質土・V層 淡黄褐色砂質土・VI層 暗褐色砂質土・VII層 茶褐色砂質土 中世の遺物包含層・VIII層 淡黒褐色砂質土 弥生時代後期の遺物包含層で、調査地北東より流れ込んだと考えられる転石を多く含む・IX層 遺構面（弥生時代後期）である。なお、X層以下はトレンチによる断ち割りを行ったが、縄文時代の遺物包含層、遺構等、その他の遺跡は確認されなかった。また、調査地の東約1/2の範囲については、転石の除去が困難なためVIII層上面まで検出できなかった部分もある。

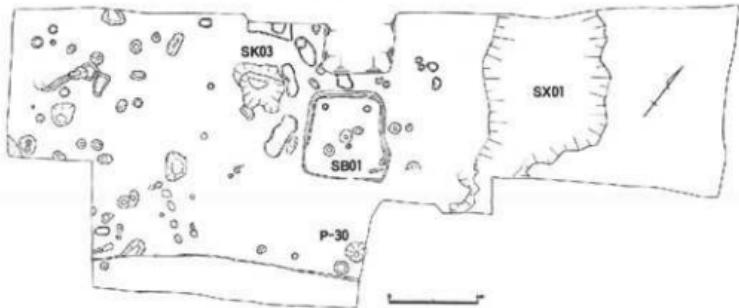


fig.20-2. 調査区平面図



fig.20-3. 調査地全景

検出遺構 今回検出された遺構は、近世以前の石材採掘坑1ヵ所、弥生時代後期の竪穴住居1棟・土坑7基・ピット71ヵ所であった。

石材採掘坑 (S X01) VII層面で検出された縦約7m以上、横約6mの不整形の土坑で、南西部は、自然流路状の砂砾流で削られていたが、現存の深さは約2mある。このS X01のある部分は、調査地の東半で北から南へ大量の土石流が堆積しているところで、径2~3mの花崗岩の転石が多く見られる。なお、この土石流はⅧ層の弥生時代後期の遺物を包含する層に相当している。

S X01の坑底には、矢穴を残す剝片状の石材や、切り出し、加工時に出了と考えられる石屑が堆積していた。また、坑壁に接してあった径約2mの二つの石には、矢穴が打たれ、割れたままの状態で放置されていた。

以上のことから、S X01は花崗岩の転石を切り出した石材採掘坑と考えられる。

石材採掘の時期については、坑底より出土した陶器や、層位より近世であろうと思われる。なお、埋土からは、Ⅷ・Ⅸ層を切っているため、須恵器や多くの弥生土器も出土している。



fig.20-4. S X01平面図



fig.20-5. S X01



fig.20-6. 矢穴のある石

S B01

弥生時代後期の一辺3.4mの方形堅穴住居である。検出面からの深さは、約15cmと浅い。中央に径50cm・深さ15cmの土坑を設けており、土坑内埋土には焼土が混じっている。周壁溝は全周せず、西壁の南 $\frac{1}{4}$ および南壁には設けられていないと思われる。支柱については明確でないが、4本と考えられる。

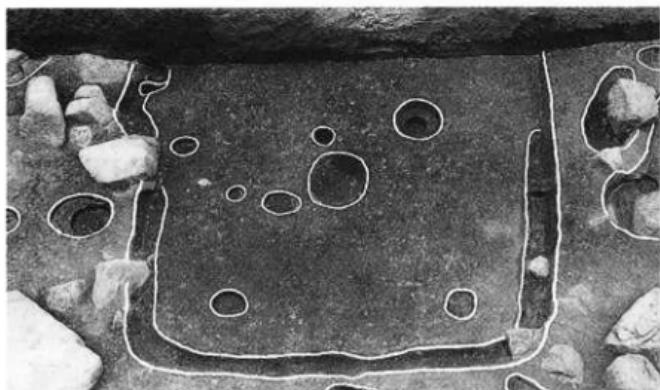


fig.20-7. S B01

土 坑

土坑は7基検出されたが、いずれも不整形で用途は不明である。いずれも、弥生時代後期と考えられる。

S K03は、長径2.3m・短径1.7m・深さ0.4mの不整橢円形の土坑である。

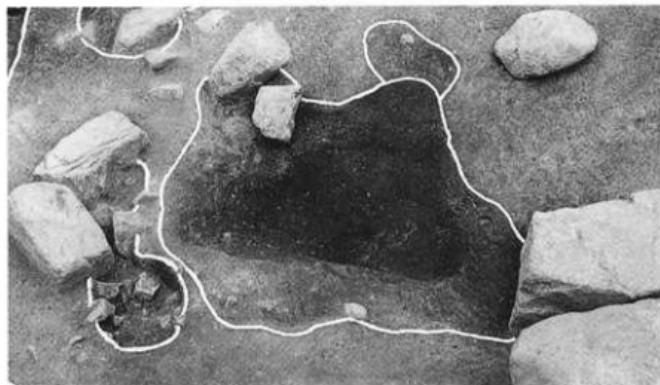


fig.20-8. S K03

ピット

71のピットが検出された。建物址としては確認できなかったが、西半部のピット群は掘立柱建物になる可能性もある。いずれも弥生時代後期と考えられるが、P-30（径90cm・深さ30cm）の埋土からは、弥生土器と考えられる細片とともに、1条の突帯を巡らす網文晩期後半のものと考えられる土器片が1点出土した。

遺物のはほとんどは包含層からの出土である。埴層からは、須恵器、土師器、瓦器、白磁、錢貨（開元通宝？）が、埴層からは弥生土器

（後期）、磨石、鉄刀子が出土し



fig.20-9. 調査区南半部全景

ている。特に埴層では、調査地東半で花崗岩転石と混在するように多量の弥生土器が出土しており、当調査地の北東部より転石とともに流れ込んだような状態であった。

今回の調査では、3時代の遺物、遺構が検出された。

S X01の石材採掘坑は近世と考えられるが、このような花崗岩の転石を切り出す採掘址は、当地より東約2kmの郡家遺跡（岸本地区）の調査でも見つかっている。このことから、まだ2例目ではあるが、六甲山南麓において近世にこのような石切りが、一般的に行われていたと考えられる資料を提供したと言える。

弥生時代後期の遺構は、堅穴住居の他は明確ではなかったが、篠原A・B遺跡の調査とあわせると、かなり広範囲にわたって遺跡が存在することが明らかとなった。また、遺物の出土量、堆積状況からみて、調査地の北東に集落址が広がっていることが窺える。

中世の遺物包含層は検出されたが、遺構の存在する面は確認されなかった。遺物の残存状況からみて、距離的に近いところに中世遺構が存在すると思われる。

篠原遺跡は早くから知られていた遺跡ではあるが、既に市街地化されていることもあり、発掘調査が行われ出したのは近年になってからのことである。そのため、まだその様相については明らかでなく、今後の調査成果が期待される。

21. 伯母野山遺跡

1. はじめに

伯母野山遺跡は、六甲山系の一峰である長峰山の南麓斜面上に立地する高地性集落であり、これまでの調査で弥生時代中期から後期にかけての遺物や住居址が検出されている。

今回の調査はマンション建設に伴うもので、工事に先立ち、旧牛小屋山の南西斜面において試掘調査を行った結果、弥生土器が出土したため、発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の概要

重機により、表土及び流出土を除去した後、人力により、遺物包含層と考えられる暗褐色粘質土及び淡黄褐色砂質土を掘り下げた。

地形的にみると、現状では、調査区中央付近が谷部の凹地であり、わずかに平坦面が存在しているが、その東西は、共に、急斜面となって立ち上がり、表土及び覆土は下方へと流出し、岩盤が露呈している。

また、調査区中央付近は、流出土が多く堆積しており、現表土下約2.0mで岩盤に至るが、黄褐色砂質土と暗褐色粘質土がほぼ互層になっている。発掘調査の結果、ほぼV字形に凹んだ谷部の旧自然地形を検出したが、人為的な遺構は発見されなかった。また、調査区中央部東側で検出された幅約70cm、全長約150cmの花崗岩の礫は、上方からの転石と考えられる。一方、遺物包含層は、上方より流入したものであり、コンテナ4箱分の弥生土器が出土している。



fig.21-1.
調査位置図

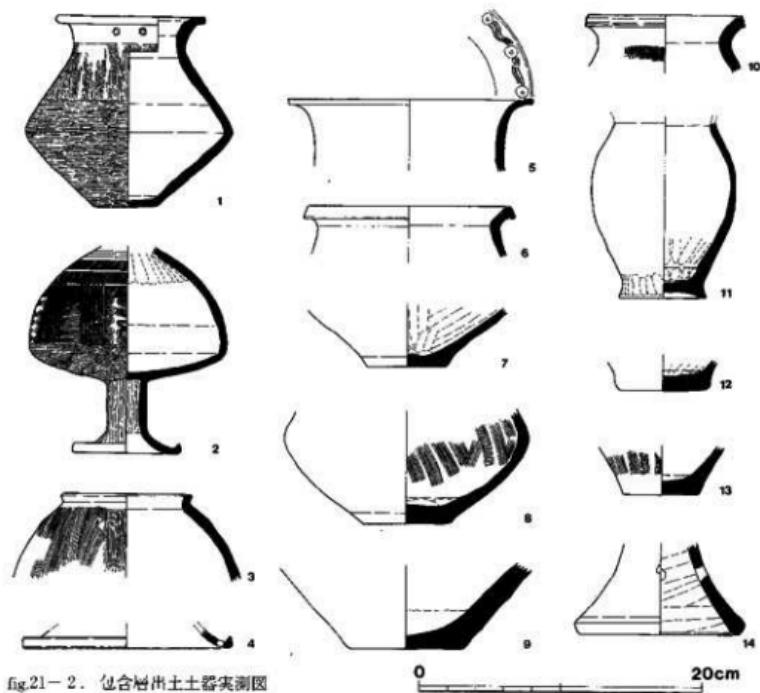


fig.21-2. 包含層出土土器実測図

今回の調査で出土した造物は、弥生時代中期中葉～後期末頃にかけての、広口壺、台付細頸壺、甕、高壺、器台などの弥生土器と、サスカイト製の打製石鏃1点である。出土土器は、いずれも調査区上方から、流入したと考えられるため、内外面とも表面がかなり磨滅しているものが多いが、比較的、文様・調整が判別し得るものもある。

3. まとめ

今回の調査では、造構は検出されなかったが、上方より流入した流土内より、弥生時代中期～後期の土器が出土していることより、当地点の北方には、弥生時代の集落跡が存在する可能性が極めて高い。

22. 郡家遺跡

I. はじめに

当遺跡は、古くから摂津国菟原郡の郡衙推定地とされていた。昭和54年度に大藏地区で初めて発掘調査を実施し、奈良時代～平安時代にかけての掘立柱建物が検出された。その柱掘形の規模等から郡衙である可能性がさらに強くなった。その後、今日までに実施された調査は47件を数えている。その成果から、当遺跡が弥生時代～鎌倉時代の複合遺跡であることが判明した。特に弥生時代後期から古墳時代前期と、古墳時代後期の濃密な遺構の分布は特筆される。

今年度は都市計画道路山手幹線内で2ヵ所（城の前地区第26・27次）、住宅建設に伴い、9ヵ所（城の前地区第24・25・28次、大藏地区第2・3次、岸本地区第1次、地蔵元地区第3次、下山田地区第2・3次）の調査を行った。



fig. 22-I-1. 調査位置図

II. 城の前地区第24次調査

1. 調査の概要 弥生時代後期から鎌倉時代に至る遺構が検出された。以下時代順に各遺構・遺物の記述をすすめる。

弥生時代後期 この時期に属する遺構は、集石墓（S X01）、溝（S D04）及び流路2である。S X01は、平面形が $4.0 \times 4.5\text{m}$ のほぼ方形で、深さ0.7m前後の掘形で、その中に礫及び土器が大量に埋置されたものである。礫は、径数cmから40cm前後で、主に花崗岩である。その数は、数百個にのぼる。また土器は、弥生時代後期に属するもので、細片になったものや、ほぼ原形を保つものなど様々で、コンテナー（28ℓ）に25杯と多量に出土した。

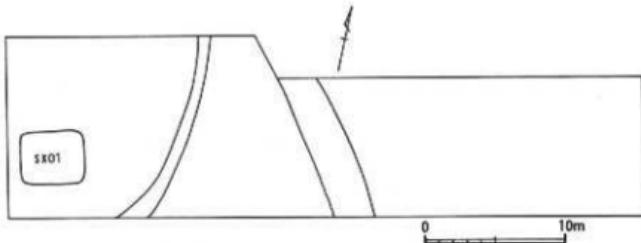


fig. 22-II-1.
弥生時代の遺構



fig. 22-II-2.
集石墓

この礫や土器は検出面から底面まで途切れることなく、密につめられていた。これらを取り除くと、底面に2ヶ所のピットが存在した。このピットは、長径約40cm・短径約15cmの長楕円形で、深さ10cm前後である。これが1.5mの間隔をおいて、向かい合って存在した。この形状、間隔、土坑内での位置から、木棺の木口板を立て込むピットと考えられ、当遺構の性格は、集石墓と考えられる。

S D04は、調査区を南北に走る溝で、幅0.7~2.1m・深さ0.1~0.2mである。出土遺物は極めて少ないが、S X01と同時期と考えられる。

流路2は、調査区内で最も早くから流れているもので、底面近くに土器の小片が多く包含されていた。幅3m前後・深さ1m前後である。



fig.22-II-3.
集積墓細部①



fig.22-II-4.
集積墓細部②

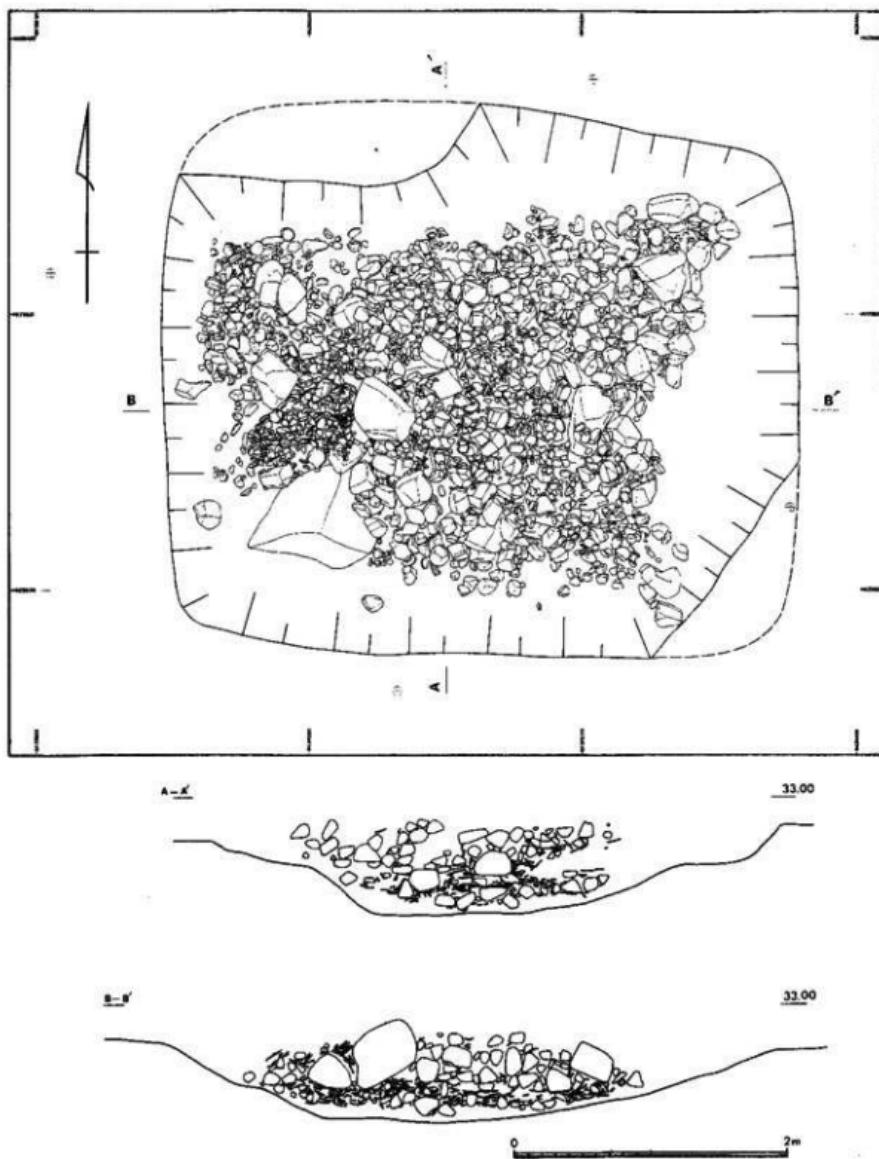


fig.22-II-5. 集石墓平面·斷面圖

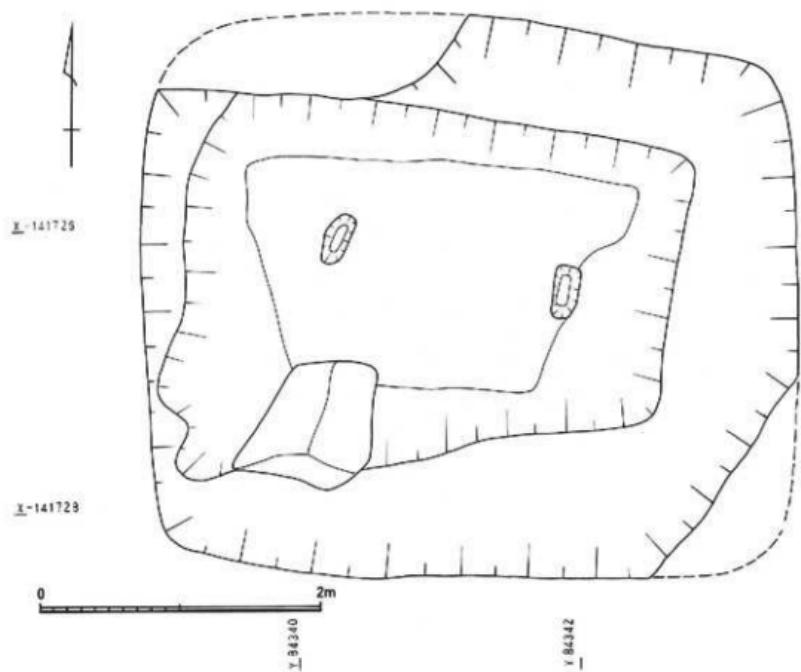


fig.22-II-6. 集石墓完掘状况平面图

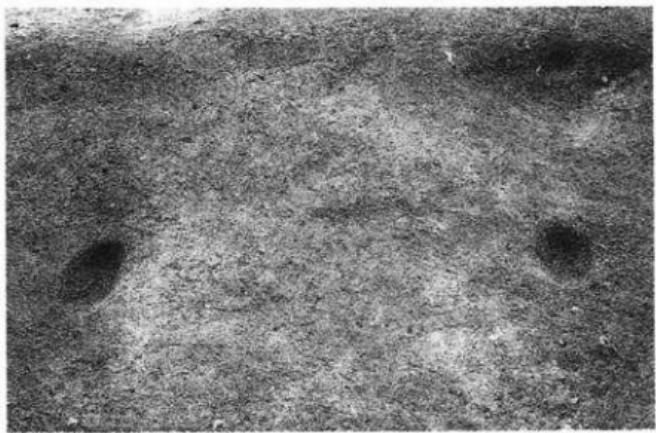


fig.22-II-7.
集石墓床面木棺痕迹

古墳時代後期

この時期の遺構は、竪穴住居（S B04～06）3棟、掘立柱建物（S B07）1棟、流路3条である

S B04は、3棟のうち最も古いもので、流路2が一時期埋没していた時に構築されたようである。一辺4.7mの方形であるが、深さ0.1m前後と残存状態は悪い。出土遺物は、須恵器・土師器のほかに滑石製の臼玉などで、これらから6世紀初頭と考えられる。

S B05は、S B04に後出するもので、4.7×5.7mの長方形で、北辺にカマドを有する。このカマドの煙道は、住居の北壁をトンネルで抜け、外へ出た部分で若干東へ曲がっている。このカマド内及び周辺には、多量の炭・灰が残されていた。その中には、食料にしたと考えられる動物の骨片が含まれていた。また、カマド周辺及び東半部には、多くの須恵器・土師器が残されていた。これらの遺物から、この住居は6世紀前半に属すると考えられる。西辺には、わずかなふくらみが見られるが、この部分には焼土塊が集中して存在した。しかし、カマドではなく、その性格は明確でない。

S B06は、一辺4.8mの方形で、S B05と同様に北辺にカマドを設けている。煙道は、トンネルで住居外へ抜け、東へ山がり幅0.2m・深さ0.1m・長さ1.8mで溝状に残存する。出土遺物は、須恵器・土師器で、6世紀後半のものであるが、その量は少ない。

S B07は、2間×2間（4.9×3.3m）の掘立柱建物で、その柱穴掘形は、径0.3m前後・深さ0.3m前後である。時期の確定は難しいが、古墳時代後期の遺物が出土している。

流路1・3は、北端で一条になるが、時期を変えて流れていた可能性が高い。出土遺物は、5世紀中葉から6世紀後半のものが混在する。

流路は、弥生時代後期に流れ始め、一時期埋没していたようで、6世紀前葉に再び流れている。砂及び粘土が互層をなしており、6世紀初頭の遺物を含む。

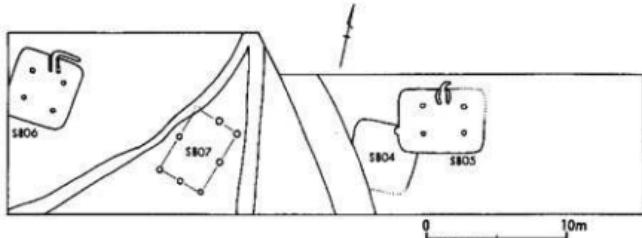


fig 22-II-8.
古墳時代遺構

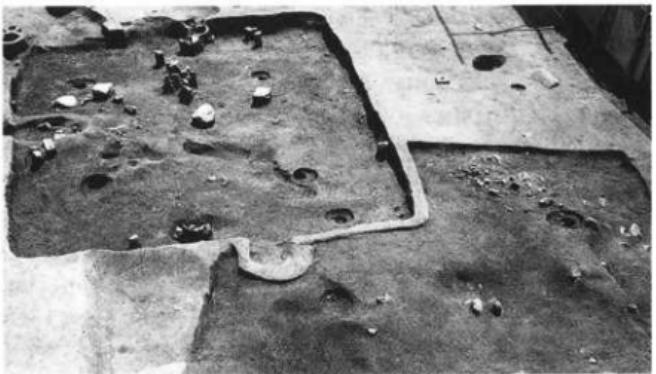


fig.22-II-9.
S B 04 + 05

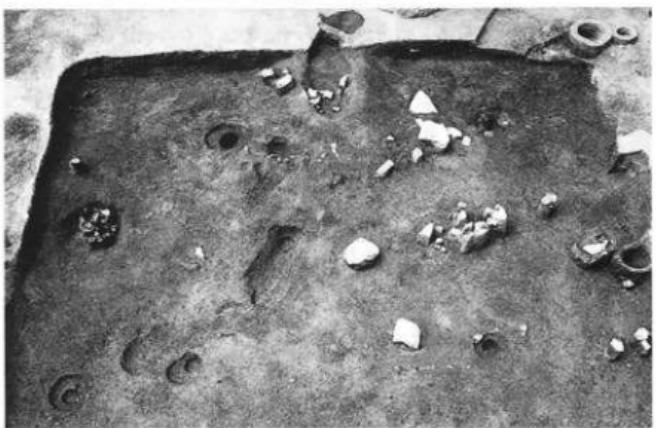


fig.22-II-10.
S B 05



fig.22-II-11. S B 05カマドと煙道



fig.22-II-12. S B 05土器出土状況